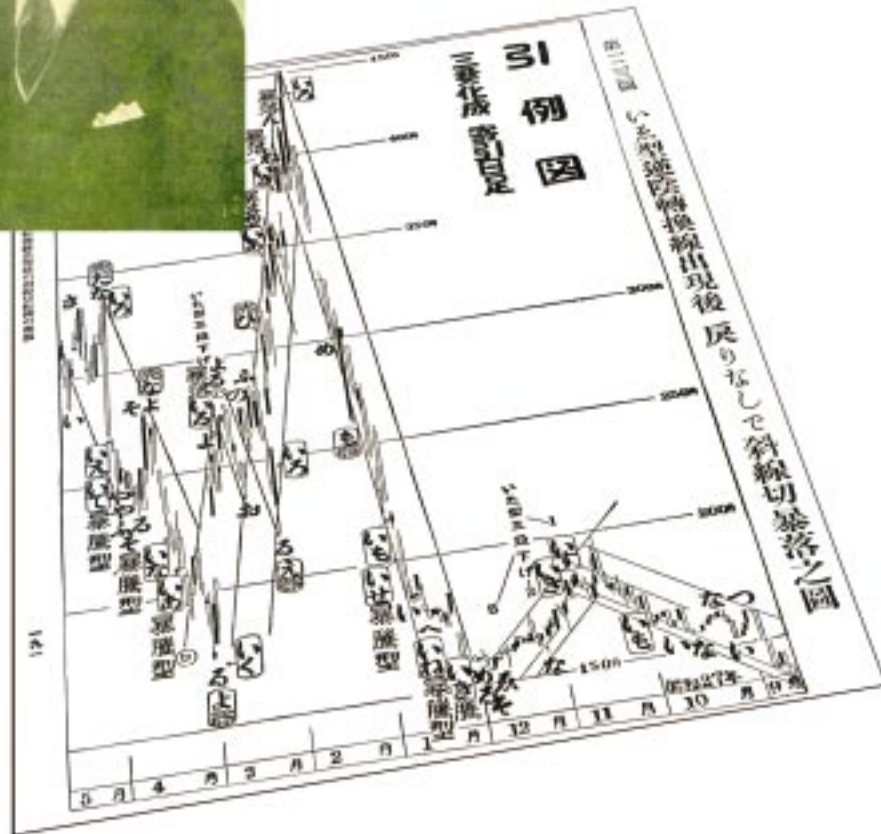




柴田秋豊

「私の履歴書」



「私の履歴書」 全文紹介の意義

相場大辞典の著者であり、相場必勝法「天底転換型罫線」の考案者である柴田秋豊は、まぎれもない天才だった。現在の投資家の中にはその名前さえ知らないという方も多くいることだろうが、柴田秋豊は、戦前・戦後を通じて「罫線の柴田」の異名をほしいままにし、理論や材料、人智判断を完全に排して、機械的な方法により相場を観測し勝利する方法を創見するに至った、希代の相場師であった。

彼が書いた罫線をはじめて目にするとき、だれもが、その膨大な引例図に圧倒され目を奪われた。延べ5000年に及ぶ罫線を、心血を注いで研究した成果がはっきりと見てとれるからだ。

柴田秋豊は昭和47年に亡くなったが、天底転換型罫線は相場の黄金法則として、株式・商品相場がある限り永劫に輝き続けていくことだろう。

読者の中には、評論家やアナリストが金科玉条としている移動平均線やエリオット波動などのアメリカ式罫線、あるいは一般的なローソク足などの罫線について解説した書籍を、読んだことがある人も多いはずだ。それらを読んでいただければ、「これで相場で儲けることはとうてい不可能だ」と、読者は気づいてくれるだろう。

しかし、柴田秋豊による天底転換型罫線は、明らかにそれらと異なるものである。二度と現われまいだろうといわれる鬼才ぶりと、天底転換型罫線の真価を理解していただくには、柴田秋豊自身の書いた「私の履歴書」を一読いただくのが一番よいと考え、その全文を紹介する。

相場への道

40年を振り返る

往年、定期米や新東（現在の平和不動産）株に、全国の仕手が集中して華やかに売買されていたころ、この種の著書は雨後の筍のように刊行され、また相場観測通信広告が、経済新聞や雑誌に毎日羅列されていたものである。これらのなかにはずいぶんでたらめの書や、金儲け主義の通信社も多々あったことはよくご承知のことと思う。

私はこの種の書を蒐集して細密に検討し、かつまた数年にわたり全国を野線修業行脚して、相場通信社あるいは指導者と称するお歴々を訪ね、野線による将来の騰落観測法につき、つばさに意見の交換をし、また討論を試みたが、結論はその根拠なき無軌道ぶりには驚嘆せざるをえなかった。

これらの指導者に頼り相場に手を出した人が、たまたま相場が反対に動いて損をした場合、はじめて己れがその憲法的確なりや否やをあらかじめ検討しないで敢行した軽率、あるいは通信社の指導力を調査せずして、そのいうがままに行動した愚かさ気づかれたことと思う。

私をしてこれを評せしむるなら、命から二番目に大切な金が、増えるか減るかの大事を決行するに当たって、他の意見を参考とすることは悪くはないが、その刹那的主張をうのみにして盲従し、その憲法が完全であるや否やの検討を怠り、また通信社の機構、経歴、手腕、能力等の調査もなさず、軽率にそのいうところに従って行動した軽拳がもたらした当然の結果といわざるをえない。

相場にしる事業にしる事をなすに当たっては、まずよく調べ、よく検討して確信を得、慎重なる注意を払って着手すべきで、運を天に任し、あるいは誇大広告または新聞雑誌の目先記事に眩惑され盲従することは絶対に慎まねばならない。

相場の観測は10年20年の研究や未熟な相場知識では、生兵法大怪我のもとになりやすいものである。こうした体験から、本書の執筆に当たっては平凡な机上の理論は一切これをやめ、実践即応の法則法示のみを記述し、従

来の著書のようなでたらめでない、根拠ある相場野線の科学的観測法を、絶対的の確信をもって著述し、数百年にわたる野線図を羅列、ひとつひとつこれに法則法示の符号を記して、その的中率の立証に重点を置き、読者自身が日々の相場に照らして、容易にその方向がわかるように編纂した。幸いに相場座右の銘としてご子孫に伝えられ、長くの殖財の一助に供せられるの栄を得れば幸甚の至りである。

なお、この書の序文において40年を回顧し、私の生い立ちと斯道研究の道程を率直に述べておくことは決して無駄なことではなく、むしろ細述しなければならない義務と責任があると思う。というのは、今この書を読まれる方々と私とは一面識もなく、はじめてお目にかかると同じなのだから、第一に自己紹介をするのが礼であり、それなしでは本書を読んでみようか、検討してみようかという気になれないと思うからである。

北海道の開拓農家に育つ

私は、明治34年4月2日、富山県で一貧農の長男として生まれ、同40年7歳のとき父に伴われ、北海道札幌市の東北、八里の地点にある石狩沃野の農村、現在の栗沢町に移住し、農家の子として育った。この町は今でこそ文化の交流に恵まれた富裕な町だが、私の移住した50年前は、熊笹や葦の原が村の8割を占め、熊の足跡も珍しくない状態で、わずか1キロ離れた学校へ通うのに、雨の日などは非常に難儀をした、幼い頃の思い出は忘れられないものがある。

私は4月生まれのため、8歳にならなければ入学ができないのだが、7歳のとき、どうしても学校へ行くと駄々をこねるのに両親が手を焼き、先生に叱ってもらつつもりで連れていったとのことである。

そのころの私は、同年の子供らの肩までよりない矮躯であったため、校長も小首を捻ったそうだが、何をテストしても居並ぶ先生方が舌を巻くできれば、これは神童？ということになり、特別に入学を許され、幼い念願

がからくもなかったものだと、亡き両親から聞かされていた。

ところが昔の義務教育は6年制でその卒業を間近に控えた13歳のとき、役場から卒業年齢に達しないため、あと1年間6年生として在学せよとの公文書を受け驚いたが、なんとか高等科に進学させてもらい、優等生落第の噂と受難を免れた。

このようにして高等2年を15歳で卒業した。成績は全甲、8年間首席で通し、しかもこの間無欠席無遅刻で、数々の褒賞と精勤賞を授与され、式場で校長から特別に賞賛された忘れがたい記憶がある。

私は幼少から何事に対しても一心不乱、心血を注ぐの情熱と魂胆を持っていた。その私が上級校への進学を夢に描かずにいられようはずがない。しかしながら昔の農家の一人息子は、小学校卒業を待って家業を継ぐのが習わしであったし、私が進学することは、とりもなおさず祖先伝来の百姓をやめ、父が永年にわたり苦難を乗り越えて築き上げてきた新農地開拓の実績と希望を一挙に放棄することになる。この現実を思うとき、また両親が慈眼を伏してひたすら家業に専念するよう諭すその心中を察するとき、どうしてこれに逆らうことができよう!! ついに涙をのんで進学を断念するのやむなきに至り、正規な学歴はいたって貧弱であることを告白しておく。

18歳の相場師誕生

現在であれば大学を卒業するのは22歳で、その大半がまずサラリーマンとして世に出るが、私は15歳で社会に打って出て、農業とはいえ自営の立場に置かれ、仕事に精励したのであるが、生来の読書癖は矯正すべくもなく、あらゆる書籍を集め寸暇を惜しんでこれを読破し、二宮尊徳もどきの勉強を続けたのであるが、基礎学問の浅い私は、事に当たりその欠陥を遺憾に感ずるところ少なしとしない。この書を記述するに当たっても、事の表現法、あるいは字句の未熟さなど、顧みるとうたた断腸の思いがある。記述の不練不熟は推してご寛容を乞う次第である。

さて、今と昔では社会事情が違うといってしまうまでも、今にして思えば、私という者は常人離れな早熟であった。わずかに十五歳、現在の子供であれば中

学2年の遊び盛りの年頃の私に父は家計一切の切り盛りを任した。というより自分から積極的にやった形であるばかりでなく、百姓の小俵の身で、当時着るものなど薬にたくもなかった洋服を着込んで、穀物商人仲間と互角のつきあいをし、18歳の春から、小樽米穀取引所に入りして一流相場師に伍し、金縁眼鏡に金指輪、さては22型の金側時計、自動車も二等で得意顔、成り上がりの田舎者そのものという行き方、今なお旧知にこれをいわれ、そのころを回顧するとき、穴でもあれば入りたい、冷や汗の流れる気持ちとする。

こうした間にも物質的には何の苦勞はなかったが、上級の学校へ行けなかったことが残念でたまらず、ではその欠を補うに独学をもってしようと、何より好きなことではあり、読書癖はますます高進し、農業、商業経済学からとくに物価編、相場関係に興味を感じて、その方向へと進む傾向になった。

しかし家業は絶対に怠らず、年々常雇い作男の数を増して田畑を拡張し、元気盛りだが料理屋遊びなどもつてのほかという精励、格勤ぶりは近所の目をそばだたしめたものであった。

このような経路をたどり、大正14年25歳までには、広漠たる石狩平野の一角で、幅六間長さ25間に整然と区画された肥沃な美田八町五反歩を耕作し、田圃から馬車で運ばれた稲はそのまま作業所に積まれ、脱穀、旋風、脱皮、精米に至るまで、すべて電力によって作業し、作業馬三頭、常雇い作男三人、日雇い年間千余人、年間500俵余を生産する近郷に並ぶ者なき、おそらく本州方面では想像だにできないほどの大百姓にまで発展した。

今でこそ北海道における農家の作業は、よほどの山間僻地でないかぎり、みな電力を利用しているが、今から37年以前の大正7年に、自費を投じて農事作業を電力に切り替えたのは、自慢ではないが私をもって嚆矢とするといつてはばからぬ。当時、私の門戸には、農業会から贈られた精農者標札を掲げ、農業に関する品評会、共進会等への出品は常に一等の優位を占めることを常とし、たまたま二等にでもなったと

きなどは、残念で眠れなかった。

いかに高く米を売るか

さて、何が私を相場道に引き入れたか。そして前人未踏ともいわれる相場研究に身を投じさせたか。

私はこの年収500俵の米のさばき方については、非常に研究をしたもので、米相場に関するあらゆる図書を蒐集し、新聞の報ずるところによっていろいろな罫線を引き、その騰落観測に余念がなかった。かくさせたゆえんは、私が年に500俵、隣家には250俵の米の収穫があったとしても、当時は必ずしもその収益が生産量や耕作面積に比例しなかったからである。

要はこれを高く売るか、安く手放すかによって大なる差異を生じたのである。たとえば私が1俵7円で500俵売り、隣家が14円で250俵売ったとしたら、私の収益率は原価計算から算盤して、隣家の半額に満たないことになる。そうした世情が自然に私を、相場研究に没頭させたのである。

米と同様、小豆や乾藪も農家の生産品であるが、相場の天井圏で手放すのと底値で手放すのとでは、その収益に大なる差異を生ずることは一目瞭然。高く売った者は人に誉められて儲かり、安く売った者は損して笑われるのだから、誰しも相場には関心を持たざるをえないのは当然のことである。

このようなわけで、昭和15年ごろまでは米はもちろんのこと、雑穀、その他農産物相場の観測は農家にとっては大きな仕事の一つで、主人はもちろん老人、婦女から子供に至るまで、日夜寸分の間もない関心が払われていた。子供でさえ「今日はいくらで買いに来た」とか、年寄りには「三日月さんが横になったから米が安くなる」、さては日々の天候にも米価の騰落が評されるというありさままで、私に限らずそのころの人はみな、相場を観測する能力があったように思える。当時に比べると、現在は戦争がもたらした10年間の統制経済が、人類の生存競争上もっとも肝要な相場観測観念や知識を、しらすらすの間に奪い取ってしまったように思われてならない。

連戦連勝、得意の絶頂期

私は若いころから欲望が大きかったというか、太っ腹であったというか、年産米500俵の農家には満足できず、

16歳から自分の一存で正米を20俵、50俵と売買しはじめ、次第に商い度胸ができた。

18歳のとき小樽穀物取引所で、おそるおそる定期米1口100石を買ったのが、清算取引を行ったはじめてであった。これがまぐれ当たりにならなくて大暴騰し、わずかの日数で予想外の儲けになったが、考えさせられたのは、もしこれを反対に売っていたら、みすみす莫大なお金を失うところであったと恐ろしくなり、さっそく利喰して1カ月ほど市場から遠ざかった。その後数度の売買が連続大当たりであったので、18歳の終わりころには相当な貯蓄ができ、たとえこのあと損することがあっても儲けた金で賄える、矢でも鉄砲でも持ってこいという、すさまじい勢いになってしまった。

当時を考えてみると、とくにこれという観測方法を会得していたわけでもなかったのだが、相場必勝法というような虎の巻は数多く持っていた。その中にいう「相場は人気の裏に行く」とか「人の行く裏に道あり花の山」というような諺をもって、わが意を得た相場必勝法の極意であるとし、己れの思惑にそれらの諺を按配して大当たりを続け、並みいる相場師達が驚くほどの大玉を張って得意になっていた。

「勝負の神は元気につく」といわれているが、売れば下がりが買えば上がる、あたかも順風満帆、無人の境を行くの観を呈した当たり屋で通した。そして儲けた金の半額は必ず土地を買ったが、これは万一損をするようなことがあっても、一度自分名義に登記した土地を売ってまで相場に捕われることはあるまいという自重心からであったことを覚えているが、その留意は今でも感心している。

こんな具合で天下無敵のはぶりであったが、当時の相場人にありがちな酒を飲むとか、芸者遊びは一切したことがなかった。たとえ交際の料理屋入りさえ、絶対にお断りする変わり者で通した。

そのような行き方は別に吝嗇がそうさせたのではない。そのころのように金の儲かっているときは、その儲けた金を勘定するのが何よりの楽しみであったのと、罫線を引いてこれを眺め、また相場必勝本、新聞雑誌を読んで、次の出動に対処する方法を考えるのが一番の楽しみで、友人が遊ぶのを見聞するごとに、馬鹿げたことと嘲りの目をもって見ていたものだ。

私は在学中、つねにクラスで一番小さかったのが、16歳の秋から急に伸びて、19歳のはじめには5尺3寸ぐらいになり、まず中以上の体躯となったのも得意の環境がこうしたものと思っている。今の世の中にはまことに珍しいことではあるが、父母をはじめ知人の多くは、私の早熟ぶりと社会的地位に鑑み、妻帯の要ありとして、やや強制的なまでの勧め方をされ、20歳の2月、現在の妻と結婚したが、当時の私自身、むしろ遅すぎるぐらいの感じも潜在していたことが思い出されるから、今の若人に比べその早熟ぶりは自分のことながら呆れざるをえない。

大正12年7月21日の大勝利

私が徴兵適齢21歳のころは、度胸もすわり胆力も太まり、取引店も小樽と東京米穀取引所の取引員数店に分け、資力、買取ともに社会に認められた押しも押されぬ相場師になっていた。

私の一生涯を通じ忘れようとしても忘れられない日は、23歳すなわち大正12年7月21日である。このとき、私の買っていた正米と定期米の数量や、儲かった金額は明瞭ではないが、帳尻概算は小樽三店だけで3万6000円、東京を合わせて7万円以上になっていたと記憶している。このときだけは取引各店の懐具合も当たってみたい気持ちになり、一応買玉を手仕舞し、数日後に現物以外の帳尻金引揚げに小樽へ出かけたが、いずれも耳を揃えての支払で、明日という店は一軒もなかった。

東京から小樽へ送金を受けた金を合わせて、今の金にしたい16000万円。今でも記憶に保存しているトラUNKに、10円と5円紙幣でピッタリだった。これを携えて小樽駅から終列車に乗り込み、お札にもたれて高いびき、自宅から1キロ離れた駅から、夜更けた田舎道を悠々と徒歩で帰宅した豪胆さは誰にでもできない度胸骨よと、呆れられたことがあった。

このころが今日までの生涯を通じて絶頂の経済環境であったが、当時はさしてうれしいとも思わなかった。18歳のとき、はじめて定期相場に手を出して100円儲けたとき、また零落して1円の金にも窮したとき、思いがけない10円の金が手に入ったときほどのうれしささえ感じえなかった。反面、世間の人々が満足な金儲けもできな

いありさまが阿呆に見えてしょうがなかったのだから、いかに意気揚々たるものであったかがしのばれる。

関東大震災で失敗、ついに破産

誰しも有卦の絶頂にあったときのことは忘れられないし、悲嘆のどん底に落ちた体験もまた忘れることのできないものである。よく突発事件のため暴落または暴騰というが、私は人のいう突発事件の十中八九までは、一般大衆にとっては突発事件であろうが、事実はそうでなく、相場は事前にこれを知っているといたい。たとえば2・26事件にしるハワイ空襲の秘密にしる、ある者はこれを知っていたのである。だから野線には事前に、その方向を示す法示法則が現れていた。

しかし私が23歳、大正12年9月1日に突発した関東大震災だけは、空前の突発事件で、まったく神ならでは知るよしもないもの。私にとってはじつに諦めきれない、生涯を決した一大痛恨事であった。一度この凶報、全国に伝わるや、深川の正米倉庫全滅をはじめ、重大ニュースの数々をからめて相場は大波乱を醸した。五年間を通じて当たり屋で通った私も、玉が大きかっただけに莫大な損失を招き途方に暮れた。一度大けがをしたら、その経験がなかったことも手伝って、何もかもしどろもどろ、憲法にさからうことを百も承知で頑張ったり、相場は人気の裏と口にしながら、怯えて決断が鈍り、ズルズルと人気につくというありさま、冷静を欠いて焦るためか、売れば上がり買えば下がるの敗北、さんざんな失敗を続けた。

このような状態を25歳の6月まで1カ年半の間続けた。しかもこの間、仲買店に対しては一銭の迷惑もかけないという、きれいな勝負師根性をどこまでも張っていたので、当初の周到な用意もどこへやら、ついにはあらゆる資産を蕩尽し、刀折れ矢尽きて完全に手をあげてしまった。

失敗の噂一度伝わるや、それまでは人格的にも経済的にも絶大な信用を得ていただけに、その衝動は非常に大きく、輪に輪をかけて近郷に宣伝されたとのことであった。さもあるべきで、銀行組合はいうに及ばず、近郷三カ町村の金持ちといわれるほとんどの人から融資を受け

ており、その債権者総数53人、債務総額9万8000円であった。現在の金に見積って一億を突破する額だから、噂の種となるまたむべなるかな、である。

儲けた時代に買った土地その他の不動産は、時価で5万円を越すものであったが、資金繰りのため、その大部分は表面化しないよう手放していたから、結局18歳から25歳までの7年間の相場損益は、利益8万円、損失18万円、現在の金にして差引き1億円の負債を背負った結果になったのである。

泥棒にも三分の理屈ありというが、当時私は、このような大金を貸してくれなかったら、こんな大損をしないですんだであろうものをと、債権者に対する逆恨みの念も萌さないではなかったが、同時に25歳の若僧が10万円の借金、じつに信用の二字ほど大きな財産はないとくづく考えさせられた。

破産の労苦、骨髓に徹す

この失敗内容が一般に知れわたったのが25歳の10月で、時の商工会会頭その他お偉方の尽力で、債権者会議が開かれたのは12月であった。その会議が型のごとく進み、債務に対する私の所存と対策に関する詰問がなされたとき、私の熱勢溢れる答弁は満場を圧し、とうてい25歳の弁とは思われなかったと後でいわれた。

その要旨の大略は、まず自分の不始末から、大勢の方々にも多大な迷惑をかけたことに対し、懇懃な陳謝をなし、債務の処置に言及、事ここに及び、自分の口からあれこれとお願ひすることは沙汰のかぎり良知が許さない。皆さまのご意向に従う一途あるのみである。百両のかたに編笠一蓋で、私が丸裸になり法律上の破産宣告を受けることも異存なく、残っている財産に対してもいささかの未練もない。それですむならいと易いことであるが、それではあまりにも申し訳がない。身を粉にしても今日のご迷惑を解消し、ご高恩に報いさせていただきたいの念でいっぱいなのである。もしこのさい、ご寛容が得られ、私の頭脳と手腕に多少でもご期待がいただけるなら、今しばらく生かしておいてもらいたい。

これはけっして一寸逃れの口実ではない。今ここで言明は避けるが、私には計画している方策があり成算がある。それは相場を張ることではない。今、研究している

観測法が完成するまでは、相場には絶対に手を出さない。また左前になってから毎日飲んだ酒も絶対にやめることを誓う。ただし今後行う私の仕事についての干渉はあらかじめお断り申し上げる。私の第一念願は、期日の約定は致しかねるが、現在の負債元利の完済と相場観測法の完成である。しかし私はあえてこの一方的とも見られる希望を、どこまでも主張するものではない、このさいはまったく俎上の鯉で、皆さまのご意志のままであると真実を述べた。その一言一句が大いに債権者諸氏の感銘を買い、金があったらまた別に貸してやりたい気持ちになったと、今なお話の種になっている。

このとき、ある人は借金を何年と棚上げ、あるいは無利息にしようという案を出したが、私はそんなことをしてもらうぐらいなら、一番気楽な分産にしてもらおうと頑張った一幕もあった。が、結局、私の建言が通り、ただ2人を除き51人の了諾を得ることになった。そのご理解と温情には、心から頭が下がり泣かされた。この場の感激は今なお脳裏を離れない。

こうなっては100円の借入れもできるものではないし、また借りようとしなかった。残された約8000円の財産によって10万円を生み出さなければならないのだから、事は重大である。無理をしてもつぎつぎに利子を支払っていく重荷に加えて、2名の不賛成債権者が保証人まで差押をするという破目に追い込まれ、その苦勞は真に骨身を削られるに劣らぬものがあつた。

罫線に真理を求めて

再起と罫線研究への執着

さて米相場を絶ち酒をやめた私が何をやったかは、あまりに複雑だからその大半を省略するが、当時の荒い儲け仕事という仕事は何でもやった。土木建築の請負、料亭の経営等々、まったく死にもの狂いの努力を続けた。この苦難時代のあるときは、電灯料の滞納で真っ暗な料亭としたことがあり、抱え妓全部のお座敷着を差し押さえられた、涙の出るような場面もたびたびあったが、この七年間どんな無理をしてでも借金の返済は着々やったので、昭和7年32歳のときには、全財産を売り払えば、借金の完済が可能というところまでこぎつけたので、いさぎよく住みなれた家屋敷から衣類に至るまで、持っているもの一切を売り払って一応負債を完済し、友人の一室を借りてこれに移り住むことにした。

こうした間にも罫線の研究ばかりは、1日もゆるがせにしたことはなかった。絶対的な科学的法則法示の完成を目指し、精根を傾けての努力を続けていたのだが、研究を重ねるに従い難しくなるばかり。しかし負けるものと、生来の粘りがますます強くこれに取り組んで離れず、研究を続けたものであった。それは相場での失敗が骨髓に徹してうらめしく、苦勞に対する復讐の念も手伝っていたのであるが、その執念のほどを顧みて、空恐ろしいほどである。

今日では室借りあるいはアパート住まいは、世上ありふれたあたりまえのこととされているが、当時しかも田舎町で家族持ちが室借り住まいするなどのことはまったく稀有な、いや一人もいない時代であったから、世間が驚いたのも無理はない。このとき債権者が合議のうえ、元利ともきれいに返してもらったのだからと、金500円を包み金してくれたが、その心尽くしには心から感謝するが、私には深く期するところがある。今後、万が一にもこの埋れ木に花が咲いた場合、皆さまからの涙金にすぎって世に出たといわれてはこの禿げ頭が泣くからと固辞して受けず、上下揃わぬ夏服一着で家族三人を引き連れ、流れ川で尻を洗った清々しい

気持ちで引っ越したことを思い出すと、若いころの元気がしのばれる。また、友人が私の落ちぶれた様子を心配して、ある請負業者の支配人として、高給をもって就職方を斡旋してくれたが、自分には生涯をかけて研究しなければならない相場罫線学というものがあるので、せっかくだと断った。この二件の拒絶と物にこだわらない磊落な仕ぶりには、みなが呆れて二の句が出なかったと今さら言われるが、さように罫線学に対する執着は正気の沙汰ではなく、「三ツ子の魂百まで」とは私のことと思う。

しかしその直後、8月のお盆と9月のお祭りには、さすがの私もホトホト閉口した。というのは、当時田舎のお盆とお祭りには平常着で外に出る者など一人もないありさまであったのに、着るべき紋服や晴着が一枚もない。整理までは人一倍良いものをあり余るほど持っていたのだが、一枚も残さず一切合切を売り払ってしまった後なので、御輿の渡御やにぎやかな笛太鼓の音を身近に聞きながら、三日間室内にとじこもって罫線とにらめっこをしていたことは情けないことのかぎりであった。

今のところ、私の生涯には鼻高々と話せることが何ひとつないが、今日の金にして1億円に余る借金を利子一文まけてもらわず、7年半かかって完済したことと、本書発刊の念願貫徹だけは公言してはばからないもの。自分からいうのも異なることだが、じつによくもやったものと自賛している。

株式相場と米相場

往年の花形株短期新東が上場されたのは大正13年6月で、これが株式相場の人気をさらい、本格的に動き出したのは私が借金から逃れ出た前年の昭和6年、31歳のときからであった。

それまでは相場といえば米相場、すなわち定期米売買が人気の焦点で、東京の蛸殻町、大阪の堂島が消費都市として2大市場、桑名、新潟、下関などは産地としての大市場で、3カ月の先物売買が百石単位であったから、現

在の闇米1升が130円とすれば、その百石すなわち130万円が最小1口の金額である。

現在なら1株130円の株式を1万株単位で売買するに等しい。昔の米の売買証拠金ははなはだ少額で、だいたい総代金の5%、百石1枚で200円くらいであった。そして相場が仕掛けの反対に1円動くごとに追証金の請求が取引員から来る。もしこれを送らないと手仕舞される。つまり1日に2円動くとも100円ずつ2回の追証請求があり、これを送金しなければならない。そのころに比べると、今日の米の値段は500倍になっているから、百石の代金が150万円、証拠金が一割としても15万円ということになる。百石が最低の1枚で、これを10枚50枚と平気で売買したのだから、その豪勢さは現在では信じがたいことである。

忘れもしない。私は1日に3回の追証金を電送したことがある。夜放れ、すなわち昨日後場大引と今朝の寄付値段が100丁、すなわち1円幅動くぐらいのことは珍しくなかった。ときには1日に2円の騰落、すなわち証拠金全額が飛んでしまうこともしばしばあったのだから、ひと月前の栄華も今は夢と化したり、今はこれまでと悲嘆のどん底に呻吟していた者が浮かびあがって、飛ぶ鳥落とす大尽に成り上がることも珍しいことではなかった。栄枯盛衰変転の急テンポはこの社会の常であった。

相場の世界の今と昔

この激しい戦場の米穀取引所は、大東亜戦争にまで発展した日支事変初期の昭和13年、米が統制品目となると同時に、華やかな歴史を残して終幕を告げた。

一方、株式市場は大正13年6月に短期新東が上場され、米穀取引員の大半が株式取引員となって活躍、昭和19年までの20余年間、華ばなしい角逐を繰り広げたことはご承知のとおりだが、その後における通貨価値大変動のため、とかく錯覚を起こしやすいので、当時と現在とを比較検討してみたい。

第1図は短期新東週間足20年間の一部であるが、最高値は昭和8年の230円、最安値は5年の82円60銭だから、今の通貨価値を割高の500分の一とみて、高値は11万5000円、安値は4万1300円である。したがって平均した中心値7万3700円幅を上下したことになる。要は図の110円

から180円までの価格目盛りを500倍して、5万5000円から5000円刻みで9万円までに書き換えてみれば一番早わかりである。これが事実であったから、最小の玉も相場の観測には寸分の隙もあってはならない。それも現在のように保合続きではなく平均週に5000円幅(10円)の動き、1年間に3回ぐらいは大相場があるのだから雲泥の相違である。加うるに売買証拠金は、新東が中心値の140円ぐらいのとき、だいたいその7分に該当する100円ぐらいであったから、一日に数回の売買ができる値幅が動いたものである。

このような事実から考え合わせて、極端な例を引くようだが、昔の期米や新東のようなつねに活発な動きをするものの清算取引が現在行われているとしたら、誰でも相場の騰落に関心を持たないではいられないことはもちろん、私のような二代三代かかってもこれが観測法を完成せねばやまぬとする大馬鹿者が現れるのも当然であると思われるであろう。私が米穀取引所に入出入りした大正8年から14年ごろは、商人と農家を交え定期米の売買をする人は、小さな私の村だけでも40数人いたことを覚えているが、なにか嘘か勘違いのように思えてならない。

科学としての相場観測を目指す

私は前述のように進学の念燃ゆるものがあつたにもかかわらず、上級学校への進学ができなかったので、その欠を補おうとする欲望が生来の読書好きに拍車をかけ、じつによく本を読んだ。そして読み物の方向が18歳ごろから相場関係に偏し、原論を経て実際に即応するの理を極めようと相場に関するあらゆる書を求めた。この種の書は一般書店にははなはだ少なかったので入手にはずいぶん苦労したがよく集めたものだ。

はじめのうちにはそれらが教える憲法を、一途に金科玉条とし喜んで読んだのであるが、連続するにしたがいその説くところに差違を発見し、いずれが真でいずれが偽りかの判定に悩むようになった。ここにおいて生来の凝り性は、あらゆる既刊書の説くところを根本的に解剖して観測の相違点を徹底的に極めねばと、まず過去数十年にわたる正確な罫線を基本として、いちいちその説くところと対照し、調査検討してその正否を糾し、改めて真理を探究せねばやまぬということまでいったのだから

容易なことではない。このような方向をたどったそもそもの原因は、私が学校をやめたとき心に誓った、大学卒業より以上に偉くなってみせるというつねに頭を離れない宿願と、心の鞭があったからである。

23歳、時あたかも我が世の春、順風満帆の全盛時代である。世間の人は金金金……金の世の中と人の偉さを富力で計るの態を冷やかに眺め、私の誓いは金ではない、金儲けなら誰にでもできる。現に私は、自分の力でわずか5年の間にすでに巨万の金を得たではないか。私の宿願はそんなありふれたものではない。金には不自由のない身分！ そうだ!!

普通の経済学ならどこの学校でも教えてくれるが、投機的相場観測法の講義をする中学もなければ大学もない。自分は断然この道を研究してその蘊奥を極め、この道の権威者となろう、日本一になってみせる決意を新たにしたのであった。

思うに進学を阻まれた不満が深く心に残り、大学出に対する羨望とひがみも手伝い、大学出でなければ偉くないと定まったものではない、小学校出の偉人も数多くあることは、世界の歴史が物語っている、俺は絶対に彼らには負けないぞというのが真の気持ちで、何事も「努力即権威」、精神一到何事か成らざらんだと、それから乗物の中はもちろん、用便中まで四六時中野線を手にしないこととてないほどで、今なお枕元にまでこれを置き、目醒めるごとに見入って調べる永い間の習癖となっている。

18歳で相場に手を出し大いに儲け、25歳で完全に龜を覆し、物心両面の悩みと辛さは骨髓に徹するものがあった。回顧すればことここに至った道程はきわめて明瞭である。この方法なれば絶対に勝てるとする確たる信条を持たなかったためという一言に尽きる。はじめのあいだ儲かったのは、予感が偶然にそして偶然が幸運にも連続したにすぎないのだ。誰しも自尊心は持っている。することなすこと儲かるときには、いつか自分が他人より優れた才能や手腕を持つ者であるかのような自惚れに浸るのであるが、一朝思惑がはずれ買えば下がり売れば上がるの曲がり屋になったが最後、確固たる信頼のおける法則を持たないかぎり、しどろもどろでどうにも收拾の方法がなくなるものである。失敗の結果私に残されたもの

は、貴重な無形の資産である、このいと若き体験と観念であった。そしてつくづく考えた。相場の動きは材料に左右される人気の動揺であり、材料人気その他一切の現象の集積が描写されるのが野線である以上、これを学理的に研究すれば、科学というに足る絶対間違いのない観測方法は必ず発見できる。これを極めてその方法を創見しよう、いや必ず完成してみせる。自分一代でできなければ二代三代、孫にまで引き継がしても完成させなくてはおくまいと、23歳当時の決意をさらに固くし、これが完成を見るまでは投機一切を禁断するの誓いを立て、誠に一心不乱、寝食を忘れての研究状態はとうい筆舌では表現することのできない、狂気の沙汰といわれたほどのものであった。当時の境遇でよくこの難事をやり通したものだ、わがことながら感服している。

日柄観測法の研究

往時の相場観測書には十干、十二支、九星等々によるその日その日の高安や、天底日を指摘したものが非常に多かった。私は百年曆に照らし、数10年の野線を調査していちいちその適不適を統計してみた結果、天底をつける日が何の日という断定はあまり的中していない。また、何の日は前場安後場高ということ、あるいは暴騰暴落ということについては、干支宿星個々についてみても、これらをいろいろに組み合わせせて検討しても、一貫した信頼に足るものは見出しえない。それらの説は失礼ながら未完成であって、いずれも実質的に確固たる根拠のない浮説といわざるをえない。私が改めて日柄観測方法を研究の結果、干支宿星のある日またはその重なり合うある日が天底をつけると、ときには数カ月間、その日が回ってくると天底を示現することを確かめえた。しかしその日柄は不変的なものではなく、ある期間を過ぎるとズレて別の日柄に移行するという統計図の創見に成功した。それから、この移行がなぜ起こるか、いかなる場合に新規の天底日が現れるかの発見に心血を注ぐこと7年、昭和9年34歳のとき、短期新東九年間の野線に照合して間違いのない法則を発見したのである。第2図および第3図に掲げた引例図は天底日変化の様相を註釈した図例の一部であるが、私にかぎらずこの奥義を会得した人はだれでも、次の天井日は何月何日か大底日は何日かの変化日

が、少なくとも一、二カ月先まではわかるのだから、おそらく伝授を受けた人は驚いて腰を抜かすほどの法則である。試みに第2図、第3図に示す変化日を、1から23まで順次、丹念にご覧願いたい。

このように的確に当たる、いやわかる原因は干支あるいは日蓮の説いた二十八宿、すなわち教文によって天底日が因縁づけられているのではない。科学的に究明すれば、昔の短期新東は30日期日の清算売買であったので、回ってくる因果玉すなわち仕手関係の期日決裁による人気の裏が表れて天底を作るものであることや、天底日や変化日がある日数続いたのちに移動するのは、別に納得できる原因によることがわかった。

この日柄観測法は「天底と変化日予測大辞典」として続いて発刊の予定であるから、ここには詳述を省くことにする。

鉤足観測法の研究

前期の日柄観測の真理研究が完成したのを機として、約2カ月にわたり全国の斯道諸先生や研究家を歴訪して、おのおのがその心血を注いで得られた法則や憲法を見せてもらい、大いに得るところがありそして深く感じたことは、罫線学の幅の広いこと、奥の深いことであった。日柄観測法は真理ではあるが、騰落観測には他の真理を極めた法則を総合練成し、その合致点を極めることがもっとも肝要であると痛感、ふたたび門戸をとざして鉤足による観測法の研究を継続した。

往時の憲法あるいは罫線学の8割までは、本書のような棒足ではなく鉤足によるものであった。というのは当時相場の動きが激しく、1日の棒足中にも何回、あるいは10数回の波動が含まれているため、一本の棒足をさらに分析して相場の強弱を見ることができる長所があったからである。反対に、現在のように波動が小さく毎日小幅往來を繰り返す相場を5円、10円、20円足、さらには新値足や空間足に描くと、1週間または1カ月間が1波動によって描かれないので観測に不合理が生ずる。このような理由から、私も鉤足研究に重点を置き、昭和13年、39歳まで5年間これを続けた。

この間、鉤足による観測法を八法則完成したが、これ

らはみな多少とも人智判断を必要とする短所があり、実戦に用いる場合、その解釈がとかく我田引水になりやすいであろうことを憂いていたのだが、最後には人智を挟まない機械的売買法を、新東相場以来の証拠図とともに完成することができた。第4図に掲げたのがその略図の一部で、白線になったところを買い、黒線になったところを売ればよい。至って簡単な秘奥である。しかし、本図になるまでには日足と同等の労力を必要とし、創見には非常な苦勞が払われたものである。

このほか鉤足観測法をまとめて後日、「鉤足売買法大辞典」として著述する予定である。

罫線修業時代の苦難

あえて敵を求めて

その昔、武人は剣術を会得すれば諸国修行に旅立ったとのことだ。それにならったわけではないが、私が日柄観測法で全国を行脚し、多分に得るところがあったのと、斯道研究を志したときから今に至るまで、その目標は自分が金持ちになることではなく、ひたすら罫線学の神秘を極め、その道の日本一となって、大学出以上の者たらんことが念願であったので、これまで研究した秘訣を携えて全国に行脚し、この道の諸先生や研究家にふたたび会見して力試し他流試合をし、他の良きところを探り、一面自分の創見した法則の絶対性を確認しようと決心した。

そこで第1回の行脚をしたときの経験から、まずその訪問する相手、すなわちわれこそはというその道の権威者や、隠れた研究者を探し出すことに思い定め、その方法に苦心したが、その方法として、当時相場に関心を持つほどの人なら必ず毎日目を通して、今日の『日本経済新聞』の前身、『中外商業新報』に、人智を挟まぬ機械的売買法による短期新東上場以来の驚異的利益の記録を発表し、「これに勝る売買法をお持ちの方や、この法則を見たいと所望される方は遠慮なく申し込まれたい、自費をもって全国行脚をするから必ずお目にかけると3段抜き1ページ幅の広告を連日したところ、100数10人の申し込みがあった。そこで札幌を出発、それらを訪ねて罫線修業をすること4年余、しかもそのとき使用した名刺の裏には「この憲法がはたして日頃念願する日本一であるやいなや、もしこれに勝る法則あらば、改めて研究をやり直す決心、ご遠慮なくご検討願わく、なおこの道の権威者をご紹介願いたい」と印刷して散布、東京、大阪、名古屋の3大市場都市にはいずれも1カ月以上旅館に滞在して、心にもない前記のような高慢無礼な言辞を用い、あえて敵を求めたため、あらゆる研究者に面接することができたが、これこそという憲法はついに見ることができなかった。

こうした間に日支国交は破綻をきたして事変に進展し、昭和11年私が37歳のとき、はじめて出征があり、37、8

歳組が一番乗りで、軍籍のない私を残し、机をともにした竹馬の友は揃って出征したが、その半数までが戦死し、遺骨と化して帰還したのは悲しきことの極みであった。戦雲は日に熾烈の度を加え、43、3歳当時は名古屋市に釘づけとなり、帰るも行くもならない情勢となってしまった。

幸か不幸か昭和20年3月に入り、市の大部分が焼け野と化したなかに、わずかに残ったわが家であって、さてこれからいかがしたものかと思惑していたところへ、3月25日、B29の100機の空襲、250キ口爆弾10数弾の投下を受け、私の家も吹き飛んで焼けてしまい、いたるところ死屍累々のありさまは、思い出すだに身の毛もよだつ惨状を呈した。幸いに死傷を免れ防空壕からはい出した私は、急速全焼証明をもらい、命からがらトランクただひとつ持って、郷土アカシヤの都に落ち延びたのは、終戦の年4月12日であった。

こうして終戦を札幌で迎え、中央を離れて閑居することになったが、やがて来るであろう自由経済や相場活躍時代を夢見て、罫線のみを唯一の友とし「武士は喰わねど高楊子」でその研究に余念がなかった。とはいえわれも人の子、敗戦の台風渦を巻き、その不遇を嘆ぜずにはいられなかった。それに加え名もない闇成金や俄大尽の、人もなげな暴漫ぶりを見ては、歴史に見た、敗戦に落ち行く上皇が木影に雨宿りされ、その不遇をかこってお詠みになった「あめが下頼む蔭とて立ち寄れば猶袖濡らす松の下露」の三一文字の意もしのばれ、滲々と世のありさまを嘆じ、身の憶いをあらたにさせられた。

私にかぎらず、とかく修業にはこうした苦難がつきまとうのが常であろう。

平均値公安先駆の快事

昭和22年2月の暴騰に端を発し、株界ようやく活況に入り、永年描きなれた罫線も単位を10銭から1円に書き替える時代となった。しかし、清算取引廃止によって、相場の羅針盤たる新東がその姿を消し、人気のはげ口を失った関係から、一部仕手の策動的売叩や買煽によって、品

薄株などは突飛な相場をつけ、罫線型に異状を生じ、その観測に支障をきたすの杞憂を生じたので、この弊害を除こうと、私が考案し

たのが第5図に掲げた主要銘柄100種の平均段日足である。この創作によって株価主流の方向がわかるようになった。またつねにありがちなことではあるが、とくに当時は船株が高いのに造船株は反対に安い、またある場合は紡績株が安いのに機械株が暴騰というような変態現象が頻発するので、業種別主流の方向観測用として、全銘柄16業種に分類した平均足を考案し、日々刻明に計算して罫線を描き研究した。

今日のようにラジオや新聞で報道されれば引線は容易だが、私が創案した昭和22年ごろはそれがなかったので、その日の最終値が入ってから短時間でこれを集計し割り出さなければ明日の作戦に差し支える。これには数人いた助手連中も、そのあわただしさと帰宅の遅れることに少なからず苦勞していたことは、よく察していたところだがやむをえなかった。

ところが昭和23年ごろから、各社の増資が相ついで発表になり、権利落ちが毎日のように出るので、平均足による罫線観測におびたしい支障をきたした。というのは私の平均値段は今日の単純平均値段であったからだ。そこでこの障害を除去するための引線法、すなわち先行観測用の平均足として、苦心の末考案したのが第6図で、これまた当時の証券新聞への寄稿に使用した凸版の一部である。

これは昭和24年春、全国の証券会社をはじめ各経済新聞社等に、150種平均足、および業種別平均足として発表し、その重要性を力説したものであるが、その真理に協賛されたのであろう。それから数カ月を経て、日本経済新聞社が200種平均値段を日々の紙上に掲載し、それより若干遅れて産業経済紙、ついでNHKが毎日これを放送するようになり、今日では地方新聞に至るまで、欠かさず紙上に掲載し、大衆もまたこの平均株価に多大な関心を持つに至った。

また現在のダウ・ジョーンズ式、すなわち増資株価平均値がまだ採用されていなかった当時、すでに私は前述のようにこれに匹敵する印画法を考案して発表し、相場観測に備えていたことは、現在の報道機関が私にならっ

たか否かは別として、私の誇りとしているところである。

罫線研究最後の挑戦

私はこのような経緯をたどって作りあげた、平均足による相場大勢観測法として、人智を挟まぬ4段切途転売買法を発表した。第7図はその略図の一片である。

これは昭和24年11月末に、2年1カ月の証拠図で発表したものだが、その利益率は出資金の4.7倍になっている。しかしこれは表面だけの計算で、増資による権利の利益を計算すると17.3倍、新株による利益を加算して売買したとすれば、じつに当初出資額の30倍に相当する金額となるのである。

第7図は私の創見法則としてはまことに素人くさいものではあったが、終戦前は3年に1回の割合で挑戦を続けてきたのが、しばらく中絶していたことでもあり、かたわら最後の試みとして昭和24年暮れ、50万円を投じて幅1尺3寸長さ3尺5寸、3色刷りの罫線と裏面いっぱい1万語を越す私の相場科学論を掲載したポスターを作成、無料で送呈、興義書は送料ほか諸費300円で希望者に贈呈し、もし私の創見したこの憲法より、多少でも利益の多い売買法をお知りの方には、金10万円を贈呈すると憶するところなく大書きし、懸賞金付きで広く斯界に呼びかけた。

これが私の相場観測法挑戦の最後であった。この試みに対する反響は意外に大きく、300数10名の研究家から照会につぐ挑戦、なかには1名で20数回の質疑を寄せられた方あり、遠路をわざわざご来訪くださった方もあり、斯界にセンセーショナルを起こした。

10万円懸賞の魅力も手伝ったことではあろうが、罫線観測に対する大衆の熱意と研究家の真摯な努力のほどがしのばれて、非常な満足と欣快を感じた。

しかしながらその結果は「大山鳴動して鼠一匹」のたとえのその一匹さえ現れなかった。この事実は、はたして何を物語るものであろうか？

罫線を眺める人幾10万人、これを研究する人幾万人ではあるが、罫線をたんなる相場早見表として扱い、過去の死物として持つだけで先行観測の宝刀として取り扱い研究されていないことを物語っているのである。

もっともできあがった法則法示または憲法を見て、批

判することは誰にでも容易であるが、少なくとも他の抗議に応えて譲らない一法則を創見することは非常な難事であって、失礼ながら常人には及びもつかぬことであり、非凡な人といえども、その創見には10年20年の精進が必要である。また、この間の物心両面の消費は、じつに計り知るべからざる大きなものである。そのため途中で挫折し、または未完成を知りつつ、費用に充当するための資を得ようとして、出版公表したものが非常に多いのはやむをえない世相の一端であることはよくわかるが、私の挑戦に対し齒応えある抗議も、勝負はとにかくとして、名乗り出る憲法もなかったことは、予期していたこととはいえ、さびしきことのかぎり感慨嘆せざるをえなかった。

この法則は私が創見したもののうちのほんの一端であって、はなはだ素人じみたものであるにかかわらず、なぜこれに優る法則を所持する人がなかったか？ 結論は野線観測法によって実戦に臨む場合に一番大切である、左の要点を備えた憲法がなかったからであることは、300通に余る野線研究家の書信で判明した。

- 1、10年以上の証拠野線が必要であること。
- 2、10年以上の連続野線の中に、法則が出ないで転換したことがあってはならないこと。
- 3、決定的法則で人智判断でない憲法であること。

以上の3要件に、誰もが確証を持っていないことである。要するに野線をたんなる過去の足どりとして見るだけで、確固たる根拠なしに自分の勘に頼り、希望的予測をする野線を持つだけで、百戦百態の先行観測に備える科学的憲法を知っていないということである。

この平均線による売買仕法の挑戦は、私としては、かつてないわずか二年一カ月間の野線を基にしての記録発表であったため、その後六年間の研究によって多少の不備を発見した。これを補足充填した完全な法則がすでに完成されているので、後日、第何巻かによって本書の読者に伝授の予定である。

暴落前の大暴騰に堪忍袋の緒を切る

以上は野線研究に生涯を捧げてきた私の偽らざる告白

の概要で、まことに平々凡々のようだが、40年間の生涯いや研究には、じつに涙の出るようなエピソードには枚挙にいとまがない。たとえば「そんなに当たる法則を創見したのなら、億万長者になっているではないか」とか「相場は材料で動くものだ。そんな赤黒の棒を引っ張って相場の先行がわかろうはずがない」あるいは「野線は過去の死物で、未来がわかるものではない」等々、この社会にありがちな野卑、下劣な言辞をもつての揶揄諷刺はたびたびのこと、ホラ吹きとまでののしられたこともあり、回顧して、うたた感慨無量である。

私はいまだかつて他人とはもちろん、家人のあいだでも喧嘩口論をしたことがない気の長い性質であるためもあるが、私の野線研究や法則に対してさからう者があっても、ののしる者あざける者があっても、一応の解説はするがけっして深くこれにこだわることなく、それらの人と口角泡を飛ばす態の論争は絶対にしたことはない。というのは、自分の研究と創見した法則については絶対的な自信を持っていたからである。笑われようが野次られようが、腹では君らのような平凡な頭で何がわかるかと反対に嘲笑していたのと、ひとつはそのような対応に費やす時間が惜しかったからである。

何事によれ、自分に確信の持てないことに対する嘲笑などには憤激の度が高まるものだが、確信あることに対する野次などには腹が立たないどころか、反対にその愚かささきに憐愍の感さえ湧くものである。とはいえ私も凡人である。真に涙のにじむ思いに悩んだこと幾度か、そのつど「韓信の、股を潜るも時世と時節、踏まれた草にも花が咲く、七転び八起きの浮世じゃ心配するな、牡丹もまた薦着て春を待つ」と俗謡を口ずさんで己れを慰め、そのたびごとにますます奮い起こって研究に励んだ。

こんな私であったが、昭和28年2月5日、諸株大暴騰して大天井をつけた日には、ついに堪忍袋の緒を切らし、顔面蒼白で急遽帰宅し、ただちに家族を集めて「30余年続けてきた相場指導はただ今かぎり打ち切り、以後一切の面会を謝絶する」と言葉も荒く宣言した。

これを聞いた家族は、何事が起きたのかと、しばしば言葉もないありさまであった。驚くのも無理はないことで、いったん言い出したら梃でも動かぬ私の生き方を知る妻などは、さしあたり今後の生活費問題にまで考えを

致したからである。

もともと、私は軽率な言辞はもらさないほうだが、この日は私にとって仏滅の日でもあったのであろう。すぐれない気分で早く家を出たのだが、出先で数人の株関係者から、非常な揶揄嘲笑を浴びた。この言葉はけっして私が思ったような意味で言ったものではなかったのだが、私にはつねにもなく強く響いた。早朝から四囲の条件が良くなかったところへ、刹那のひがみが手伝ったのだ、とのちに至って悟り、大いに反省するところがあった。

その嘲笑というのは、この日の2日前のこと。表れた罫線は私の法則をもってすれば強力な売法示なので、私の指導する人々に対し、大天井になることを通告するとともに証券新聞にもその旨を掲載して、銘柄を問わず一応持ち株全部を売り払って換金し、他日に備えるべきことを力説したのである。ところがわずかに二人の昵懇な人が私の説に従って、持ち株の半分が3分の一を高値に売指値したものが軽く出合って、その後ますます高値示現、他の連中はこれ見よがしに私の目の前で成行買の注文を出して、はては「先生のことだからこの上げは腹いっぱい取ったことでしょう」とからかい、店の者これに和し、私の勤めに従って売った人は、うらめし気に白眼視するというありさま。なにぶんかつての朝鮮事変以来一年余にわたって上げに上げた相場のこととて、当時の夢を追って酔いしれている大天井のことだから、大衆の見るところ、また無理もないことである。

私は、30余年にわたる研究を重ねて創見したこの暴落法則や売法示は、太陽が西から昇っても河水が逆に流れても間違ふことは絶対はないと力んだが、誰も賛成してくれない。そして相場はどんどん高値をつけて買われていく。いささか不安の念も湧かざるをえない。この煩悶の最中に突き刺すような皮肉、さすがの私も塩谷判官たらざるをえない。もはやこれまでと堪忍袋の緒を切り、憤然と席を蹴って帰宅し、前記の宣言をなし、断然社交を絶ち自室に閉じこもって、またまた法則法示の再検討に時を費やすこと三年余、ようやく創見に磨きをかけ、万全の自信をもって伝授申し上げることができるようになったのである。

3年前の私の観測いや現れた法則法示は、絶対的な大的中であったのだ。そして私の言に従った者は礼を厚くし

て訪ね、さからった者もまた私を訪ねて詫びてくれたが、当時私にわずかながらも萌した不安の念がうらめしく残念でたまらなかった。しかし、この憲法に対する信念を、ますます深くさせた鍛錬の大天井でもあったのである。

完全無欠、永遠の奥義

一心不乱に奥義書執筆

私がつくづく考えさせられた一事は、もしその2月5日以前にこの奥義辞典がお手元にあったとしたら、必ず大天井構成説に賛成してくれたに相違ない。その当時の株式罫線には、全巻に数多く挿入されている引例図が示すとおり、現れたすべての符号を書き入れる余地がないほどの売法則売法示が出ており、暴落必至の型で、その数日後には本書の順張法示が続出して大勢大転換、追撃売断行の暴落決定型になってしまったが、このような場合どんな惨落が起こるのかは、本書のような書物でその実績を過去何百年にわたりご自身で調べておられたなら、百聞は一見にしかずで、当時の熱狂的買人気をよそに、自信満々の途転売が敢行できたにちがいない。しかしあの場合には上げ相場に便乗して、買って儲けまた買乗せして利が乗り、数千万の利を得た人はざらにあり、株を持つ人はみな、地味な商売をしている人たちが阿呆に見えてしょうがない有卦の場所であったから、私が声を大にして売を説いても、法則を知らない人には馬の耳に念仏であったことは無理からぬことでもある。

書こう！ 与えよう！ そして世に残そう!! この念願をいよいよ堅くした。

この法則法示の遺漏なき活用に完璧に期するためには、下記5巻が必要である。

- 1、棒足順張之巻
- 1、棒足逆張之巻
- 1、鈎足之巻
- 1、特殊足之巻
- 1、日柄観測之巻

上の順序で伝授しなければならない。そしてこの秘奥義伝授書の発行を八年間で完遂の予定で執筆を始めた。

爾来3カ年、一切の社交面接を絶ち、30余年間違いない株式店の敷居さえまたがず、愚息豊秋と2、3人の助手を相手に、延べ5000年にわたる罫線と取り組んで、倦

まず怠まず、孜々として検討に検討を重ね、素人にもただちに应用ができるように編纂、ようやく予定どおり発刊の運びとなったが、この棒足順張と逆張法則の2巻である。

あらゆる相場に適用可能な法則

世の斯道研究者のもっとも悩みとする点は、下記の四点であると思う。

- 1、大相場に適する憲法を作れば、小相場の場合不適になる。また小相場に適する憲法は大相場には不可であるということ。
- 2、上げの途中に売法示、下げの途中に買法示がたまたま現れるのでは困るということ。
- 3、出動の型は発見できるが、この仕掛けに対する手仕舞、あるいは途転の法則が必ず出ると断言できないこと。
- 4、2、3年間の証拠図なら作れるが、連続10年間は作れないということ。

この第1巻48法則、第2巻48法示中には大相場が来れば大相場のみに見える法則、小相場に変われば小相場なるがゆえに現れる法示、その他押目、戻り、大勢と目先など、各部門を分担する法則があますところなく挙げられている。このように第1巻は完全にその方向が変化してから現れる法則であるから、多少値幅の縮まる点はあるが、観測は容易である。第2巻は素天井ドン底で現れる法示で、多少の押しまたは戻りにも出ることがあり、慣れないうちは惑わされることがあるので、まず第1巻を会得してからではないと危険性がある。そのゆえに、上巻の分譲を受けられた方以外には分譲しない方法を探り、慎重を期しているのである。

このように相場が千変万化、いついかなる様相に変わっても、これに対応する法則法示がことごとく挙げられているから欠けるところがない。あたかも水陸両用車が、陸では車が走り、川ではスクリューがこれに代わって回転

するのと同様の構成になっているのである。

48法則いや96法はとうてい覚えきれないという人もあろうが、それは食べることのみを欲して得るの努力を惜しむ食欲である。はじめはあるいは難事のように思われるが、法示の真意はみなつながりを持つもので、案ずるより生むが易しである。今の子供は学校へ行く前に、いろは48文字、イロハ48文字の、96文字を読み書きすることに見ても、覚えようという気持ちさえあれば、ことはすこぶる簡単にすむからご安心ありたい。さような杞憂は幼児に笑われてしまう。辞典はしばらく読み覚えるものであるが、まず持つべきものである。巻頭の「奥義の総括」をつねに見ていればすぐに覚えられること請け合いです。

私は相場憲法なるものは、少なくとも連続10年以上の売買純益、すなわち保合だから休むあるいはわからなくなったから休むということなしに、連続売買したと仮定して、相当の純益を上げうる法でなければ不可であることを断言する。この理由は10年ひと昔で、10年間の相場には大相場、小相場、保合、ジリ上げ、急落等々、千変万化の様相が表れる。そのすべてに対処して、しかも大利を獲られる法でなければ用をなさないからである。私の研究では10年を区切って利益を生ずるの法則は、何百年に適用しても崩れないことを確かめている。

一部の研究家が、自分の憲法は株式には不適だが小豆なら絶対的であるとか、日足は絶対的だが週間足には駄目だとか言っているのをしばしば聞くが、このようなものは憲法とはいえない。損を招くこと必定である。

本書で伝授する憲法は、商品にも株式にも共通するもので、いかに完全であるかは幾百年の挿入野線が物語っている。また世相がいかに変わり、これに対する棒足の引き方が変わっても法則法示は同じである根拠に、日足、週足、段足を掲げたのである。たとえば戦争中のように1日1本立会の場合、あるいは毎日最終値1本より聞くことのできない立場におられる人は大引段足でこと足り、常時多忙で毎日野線を引くことのできない人は週に1回の週足によればよい。

私の憲法は何足で引いても観測に変わりがない。そして見られるとおり長年月の野線を根拠としての立証を持つ法則法示であるから、何人でも肯定できることと思う。

科学的に研究し学理的体系を整えた法則法示はこうあるべきことが当然である。ゆえに法則の示すところに従って売買するかぎり、損をしてみたいと思ってもできない憲法であることを、とくにご検討願いたい。

普通の書や小説なら、その内容がつまらない面白くないとその代金を捨てたと諦めばすむのだが、相場通信や競馬競輪の予想書などは、その内容いかんでただちに莫大な損益を生じさせる。他は知らないが、私は自分の書いたものについては大なる責任を感じているのである。

何事でも自信のないことに手を出してはならない。とくに相場は自信の持てるあるものを握ってからこれに当たらなければならないが、さてその自信は何によって得られるか、証拠！ これである。そして相場に関する証拠は野線に表れる、過去の法則法示の統計実績である。

日々の相場は野線に表れ、その趣く方向を本書の法則が明示するもので、法示法則の出ない転換はないのである。この事実をよく検討していただき、本書によって相場商品または株式の売買に、百戦百勝の商果をあげられんことを願ってやまない。

定価 12万円の自信作

私は20年も前から、書院や出版社からしばしば相場観測法の執筆を所望されたが、当時の金で10万円以下では書かないのだと言い張り、ついにはその条件でよいから書いてくれと頼まれたが、そのつど時期到来を待って、と今日に至ったのは、著者としての責任の重大さを感じていたからである。

そのころの10万円といえば今の5000万円にも該当する。一見、じつに高価のようであるが、私から見れば決して高くはない。法則法示創見に至るまでの苦心努力と、確信ある観測の適正を見れば、安きにすぎると言いたいのである。

本書の執筆に当たっては、深く責任を感じ、延べ5000年の野線と取り組んで心魂のかぎりをつくして調査検討したもので、その昔、牛を画いている名画家の様子を隣室からのぞき見たら牛が画いていた、と言いつたが、私のここ3年間は全身野線となって野線をにらみ作りあげたものである。

できあがったものを他人から見れば、値段ほどでもな

いとまず書物のページ数から打算されるであろうが、世界の株式と商品について幾百年間の証拠図を入れ、棒足にならひかなる足にて当てはめても変わらないという法は、業界に30年50年生きてきた経歴ぐらいでは、とうていできるものではないことはおわかりであろうし、また私もまだ見聞したことがない。このような創見は、私のような変人がこの研究を専門に少なくとも数10年間の苦勞を積まねば完成するものではない、と断言してはばからない。

私が今日までに面接した研究家の研究状態から推し、かつ発刊のはなはだ容易でない今回の体験から推して、これだけの証拠を挙げた憲法は、今後100年以内には現れないであろうことが推定される。

再三いうとおり、本書は私の生涯を打ち込んだものである。その定価の12万が高いと思われるような方には譲りたくないのである。そのゆえに出版会社との契約書には、またとない秘伝であると認められた方だけに限定して分譲する、の条件がつけられている。なるほど12万円は大金であるに違ひはないが、私にしてみれば、この定価での分譲は血の涙が出る思いである。

今日まで数10年間、この研究に注ぎ込んだ金額は今の金にして幾億であろう。それも完成しうるか否かが不明であったのである。が、それはそれとして、本書の価値はその内容である法則法示であって、製本代等の費用は問題にしてはいないが、これとて普通の活字のみの書と異なり、製図、製版料に莫大な費用がかかっている。一例をあげると、小豆週間足3年半の凸版1枚を作りあげるのには、まず毎日前後場数回の立会値段を正確に記録して、6日目にはじめて1本の週足が1ミリ方眼紙に記入されるのだが、これを3年半の間続けなければならない。この間その足取りを綿密に調べて法則法示の記入をなし、できあがった罫線をさらにトレーシング紙に烏口を使い墨で転写し、これを縮尺写真製版するのだから、いかに計算しても1枚に1万5000円以上はかかる。こんな凸版を数100枚作りあげてはじめて印刷にかけるのだから発行部数が少ないことにも原因はあるが、1冊当たり単価は非常な高価とならざるをえない。これに執筆から製本まで三年の間、数人の助手を雇用してきたのだから、とうてい皆さまには想像のつかない額になる。私のような型

はずれな変人でなければできないことである。

反面、この憲法を知ったことにより、仮に1000株の株式を売買して120円幅を1回、2000株なら60円、5000株なら24円を1回取るか、または引かれなすんだとしたら、12万円はただとなる計算になる。

大豆や小豆なら、10枚を売買して600円幅を1回取れば、これまたただとなるのである。「指導はその場かぎり、奥義は末代まで」ということを考えたら、安いことこのうえなしではあるまいか。

終戦直後、預金が封鎖されたさいは、貧富の別なく1カ月500円でいっせいにスタートしたのが、5年の後にはすでに億の金を手にした者ができ、反面その日の米に困る者が多くできた。この事実は、たんに「正直者は儲けられぬ」と当時の流行語一言で片づけられる問題ではあるまいと思う。

今や自由経済の実相がすでに現れている。今後における貧富の差は、相場の先行観測いかんによって決せられることは言を待たない。相場の動きは神様のみがこれを知るといふ、昨日までの通用語を、はたして本書によって抹殺できるや否や、何事も研究なくして成功なしである。冷やかしいに結構、一度本書を見て真面目な検討を望んでやまない。価値は認めるが12万円はちと高いという方は、2人または数人で利用し、儲けてから各自が持たれんことをお勧めする。

相場寺の住職として

虎造は「馬鹿は死ななきゃ治らない」とうなり「馬鹿につける薬はない」と諺はいつている。私の大馬鹿は不治である、と自ら認めている。近親知友の親身溢れる忠告の注射も、私にはその効がない。次郎長伝の花形、森の石松はとびきりの馬鹿であつたればこそ、今の世までうたいはやされているのではあるまいか。

世の中には「利口馬鹿」あり「馬鹿利口」の人あり、いろいろさまざまだ。どうせ不治の病に冒されているのだから、このままで生涯を貫こう。これが私の余生への抱負であり、念願でもあるが、さてあと何年生きられるやら、どこまで徹底できるやら！だがしかし、私は身体あくまで頑健、いたずらに生き永らえるのみの愚は採らぬつもりである。

金や有形の資産を遺すことは、私にとってはさしてむずかしいこととは思っていない。しかし遺すことは子孫を座して喰うに情さしむるおそれがある。けっして採るべき方法ではない。とって金を貯められない性質に生まれ、運命づけられた私が、今さら人をまねて金を持てば、財産ぐるみ落とすかすられるくらいが関の山、さていかにせんと考えついたのが、入ってくるだけ使ってしまうに越したことはない！しかしたんなる浪費は面白くない。まず前に述べた、

- 1、釣足の巻、特殊足の巻、日柄観測の巻、の3巻をいずれも500ページで第5巻まで書きあげて後世に遺そう。そしてそれらを英文に翻訳し、最小限度に限定出版して、海外にまで伝授してみよう。
- 2、近く大阪か東京に居を移して、全国の隠れた斯道研究家をも糾合し、仮称「日本野線学連盟」を創設し、研究の向上を画り、投資家のよき伴侶たらしめよう。
- 3、全国津々浦々までつづさに訪ねて野線学講演会を開催し、講義の漫遊をしてみよう。

この3つの念願は今日までの忍苦、勉勵のうさ晴らしともなり、己れの創見をもって衆生済度的一端を果たすことができるものとして、今から楽しみにしている。このせちがらい世の中で、こんなのん気な計画を立てて、必ず実現してみせると意気まいてる。そして今の今、いまだ野線のことばかり考えて日を送り、貧乏人を代表して甘んじているのだから、呆れてものがいえないと人に評されても致し方がない。まさ

に自業自得と諦めている。
考えてみると私という者は、相場野線道に帰依し、相場寺の住職で一生を送ってきたようなものだ。相場に迷う者には説教し、討死した者の葬儀にも参列した。そしてそのつど過分の御布施を頂戴してきた。また寺に入用金があれば、信徒の莫大な寄進がある。まことにありがたいことだと感謝し、ますます野線学の蘊奥を極めて相場に迷う衆生を済度し、富の浄土に安住していただくことを念じているものだ。

人はよく、そのように的確な憲法を持ち、人に教えながら、なぜ自身が金を持ってないのかと疑うが、このよう

な質問はやめてもらう。長い生涯書くごとに公約し、つねにいつてきたとおり、私は金儲けを目的としている者ではないのだ。

釈迦は金儲けのために仏の道を説かれたのではない。キリストもまた金儲けのために十字架にかかったのではない。目標は衆生済度にあつて、その教えは永遠不滅、今なお世界のあらゆるところに拡まっている。五郎正宗はその生涯を通じて何本の刀を鍛ったか、左甚五郎はなにほどの彫刻を世に遺したか？世界の科学者や発明家が、日夜研究室や実験室に閉じこもって、試験管や顕微鏡をのぞき込んでいるのは、はたして金欲のためばかりであろうか？私には研究家の心裏はよくわかる。ここに研究家のために、改めて激励の一言を呈しておく。

本書は永久に古本にならない

野線は過去の死物で、将来はわからないもの、という方に一言しておきたい。なるほど凡人の考えとしては無理もないと同情して一応肯定するが、諺に「古きをたずねて新しきを知る」という。世の中のことばすべて過去をもって現在を知り、また将来を画るものである。野線を死物という人は、歌を歌う歌える、本を読む読めるというだけで、ブギウギではないが、何が何だかサッパリわからず、韵味がない人である。映画演劇の鑑賞またしかりで、その内容を咀嚼してこれを身につけ、将来に備えようという考えもなければ策もなし、欲望も向上心も持ち合わせのない人ではお話にならない。人間の形をした糞尿製造機といわざるをえない。

私は本書に古今東西を網羅した証拠をあげて説いている。これを読んでなお将来の観測にはどうかと怪しまれるような方がもしいたら、その方はミミズのように馬に潰されて死ぬよりほかないと申し上げたい。というのは、太古この世の生物に食を与え給う神様が、あらゆる生物を集められたとき、キツツキは顔に白粉、口には紅、晴着の装いに手間どって参列に遅れたため、一番難儀しなければ得られない木の中の虫をその食物として与えられて、今なお毎夜くちばしの痛みに嗚いており、ミミズはあの遅い歩調で身に一物もまとわず、一番乗りをしたので、糞として喰っても喰っても喰い切れない土を与えら

れた。そこまではよかったが、欲に目のないミミズは問うていわく、「土を喰って終わったり、与えられた食物に飽きたら、雨の日にはい出て、馬に踏まれて死ぬのだ」といわれたので、今の世になっても、ミミズは雨の日には道にはい出し、馬蹄の下敷きになるのだと、幼いころ父に教えられた遺訓をそのまま例に引いた次第である。

本書執筆に当たっては、古い野線は新東ほか数10種、商品数10種、日経に掲載されるUP電全銘柄2、3年間のものを例にあげて証拠にする予定で凸版原図を作り、原稿を書いたのだが、すでに三年を経過したので、そのままでは読者に前述のような杞憂を生じさせるのではあるまいかを憂い、原稿締め切りの7月末日までの週間足を製版し、かろうじて印刷に間に合わせ、適当にこれを挿入して足取りの説明用に供したのである。

本書の頒布は記名分譲であるから、今後はときに応じ変動に備える野線図を作成し、法則法示を明記して観測に万誤りを生ぜしめないよう読者宛てご送付申し上げる計画であるが、万が一その野線図が、本書のいうところと違っていたり、法則法示にくい違い等のことがあったら、必ず訪問するのだから、その筋は私の禿げ頭に痰唾を吐きかけ、ののしってくれて結構である。

再三いうように、本書のいうところは永久不変の真理であるから、長く子孫に伝えられて、断じて古本とならないことを、ここに改めて断言する。

忍苦の40年を回顧して

思えば前人未踏未完成である相場の科学的観測法研究に一身をゆだね、日夜心血を注いでここに40年。積んではこわし、崩してはまた積み、賽の河原の幼子で、回を重ねることその数を知らず、人に笑われ生活には追われたその苦難、過ぎにし方を思うとき、うたた感慨無量である。がしかし、今やその完成を見、長き念願がなかった。その爽快、満悦、何物かこれに過ぎんや、いかでか余人の知るところならんや、であって、10年いや40年また一日の感に打たれている。

見る人によっては世にも稀なる愚者、もし馬鹿者の番付ができたなら、立派な横綱の位置は動かないところというであろう。私はまたその見方にあえて反対しようとは

しない。人それぞれその性質と環境により、理想、思想が同一でありえないことを知るがゆえである。

私は絶対的な信念を持って、本書に示すところは万に一つの誤りなきことを断言してはばからない。幸いにご購入の栄を賜り、致富への道行き伴侶として、長く座右に備えられ、浪風荒き相場実戦に、諸彦の研究と照らし使い、もって大商果をあげらるるの一助となることを得れば、余生の念願貫徹でご同慶の至りである。

華ばなしく初陣を飾る

非凡の人材現れる

辞典を発行して1カ月を過ぎた昭和31年5月、突然、東京からT氏が訪ねられ、あまた斯道の著を読破したが、貴著を読んで驚いて門を叩いた。できうれば直接の講義と売買の指図を受けたいとのご希望。だが私の出張は1日1万円、ほかに旅費宿泊料のご負担を願うことになっていることを話すと、それは承知しているといわれる。

聞けば北大を出てから、東京である仕事をしながら株と小豆の売買をしているが、なかなか思うように取れず、現在小豆50枚分の証拠金(当時、1枚の証拠金1万5000円)が全財産だそうである。

そのころ当所は、100枚以下の売買指図依頼には応じない規定にしていたのだが、対談の一言半句にいささかの落ち度もなく、素朴で偉人の風格を備え、日々の相場には森羅万象が織り込まれ、それをグラフ化して観測する罫線学の神髄をわきまえていられる。

売買の前にまず研究が第一であるといわれる用意周到さには、31歳の若輩とは思えぬ堅実性と非凡な頭脳を持ち主であることもわかった。

そこで当研究所は、ご覧のとおり2週間以上は札幌を離れられない実情にあることの了解を得て、出張講義の応諾をした。しかし3年間の執筆を続けたので、この夏は全道を避暑旅行かたがた会員を歴訪し、ひと休みする予定であったが、旅費と日当の内金5万円を置いていかれたのに縛られてしまった。

相場辞典発刊後の初陣

著書執筆の3年間は、一切の指導や投資を離れていたもので、この投資が初陣となったのだが、発刊の再検討直後なので必勝を期してはいたが、昭和31年5月の小豆相場はまことに多難だった。

山種さんと児玉氏の解け合いと、30年の大豊作で1万1760円の高値から、30年の7月は3820円までの大暴落、これを山種さんが年末から年初にかけて買仕込み、その

後も着々と買占め、途中で吉川氏が三菱を背景に玉占めをしたので、5月8日には7180円まで暴騰した。

ちょうどその大波乱を演じたときだったので、商品界は小豆に明け暮れ、8000円示現必至の人気の、今月も吉川氏がない小豆を五万俵受けるとか、まことしやかに新聞が報じたので、安いという者は一人としてなかった。

はたせるかな、それを天井として下げに転じたが、この小豆を売るなんて狂気の沙汰、早く買戻せとみなにいわれるので、急ぎ上京を促す電話しきり。仕方なく飛行機で上京、日本橋の大野屋旅館に落ち着いてT氏専属の講義を始め、人気はどうであろうと新聞は何と報じようが買法則が現れないうちは手仕舞できないと納得させ、毎日罫線学の講義を続け、人気に惑わされるからと取引している山種にも行かせず、新聞の相場欄を読むことも禁じた。

この間に相場は人気の裏が出て容赦なく下げ、途転買に出たときは、200枚の新規買ができたのみか、その値から一文の下値なく途転したのだから、山種の外交さんも驚いたとのことだった。

そこからの上げで、次は400枚仕掛けられる資金になったが、この戻り天井で売法則を軽視したため相場は容赦なく再落に入り、忘れもしない7月新雨のときは、日経はじめ業界各紙は「3俵1万円示現必至」を報じ、4210円の最安値をつけた翌日の朝刊は「余り物に値なし」とまで書きたて、人気は売一色に傾いていってしまった。

それが底となって、翌日から5日間の連続ストップ上げ、それも前場一筋からのストップ値だから、売方は踏むに踏めない事態を生じた。あわてた取引所はこのとき、5%のストップ値を逆に7%にしたのだが、相場の大天底に起こる大幅の行きすぎと、訂正相場の罫線型を現実体験しての講義ができた。

惑わされるな、罫線を信じよ

この5日間の連続ストップ上げは、下げの老境で、万人売に偏してから起こった現象だから罫線学では将来暗

示線と称する。ゆえにこれからは、誰も予想できない大暴騰となるであろうと予言。今後利乗り金の胸算用は一切やめて、完全な売型になるまで押目買一貫で通さなければならぬと説明、買乗せのとき以外の相場は一切電話してくれるなど扱いのM外交に命じ、相場度胸とは、引かれ腰が弱く取り腰に強く、人の裏をいく度胸が第一であることを講義。これを身をもって体験しながら毎日、第1巻の順張48法則と第2巻の逆張48法示の講義をしたが、なにしろ予想外の儲けをしながら聞くのだからT氏もよく頭に入ったと思う。

かくして7月2日の4210円の安値から8月12日7890円の素天井で、初めて完全な売法則となったので途転売に豹変したが、この間1枚の利喰い手仕舞もせず、ただ押目買乗せ一貫で通したので、40枚の売でスタートしてから3カ月間の利喰金は2千数百万円と記憶している。

「あとからわかる相場かな」で、ひと口に2500円の下げと2500円の上げ幅を取ったといえればそれまでだが、この70日間の暴騰にストップ安の押しが2回、ストップ上げはじつに21回を数える大波乱、なかでも前日ストップ安で大引していながら、翌朝の前寄値からストップ高で終わるといふ前例のない激戦。それも仕手らしい仕手のない大衆相場だったから波乱万丈、確固たる信念の持てる法則でもないかぎり、強気の者も上げ途中で一人残らず討死にし、3カ月間に起こった暴落と暴騰を残らず取ったのは貴殿だけだと、取引した山種でも異様な目で見られたのも無理もなかったと思う。

それもそのはず、途転の売玉を仕込んでから明日千歳空港に降りた頃はストップ安になるでしょうと山種の店で豪語、家族や札幌の会員のお土産を買いに出かけている間にもうストップ安ですと、目を丸くされたのだから「勝負の神様元気につく」とか、当たるときはしようがないものだと思った。

「罫線の鬼」と言われたい

このときの上京は相場をやめるためではなく、罫線学の講義に招聘され、1日1万円の日当で、天下にその人ありと知られる近藤紡さんも上京して売買するときはこの部屋に泊まって指図されるという室を貸切りにしての待遇だったから、その費用も莫大で普通凡人のできる仕業

ではなかった。

たかが50枚の仕手で、これだけの費用を招き、直接の講義を受けたい、いや相場はいつでもできるから売買の前に研究したいと、31歳の若さでできない用意周到さには自分もまったく敬服した。

こんな人は近い将来に、必ず業界の偉人になるであろうと予想したので、毎朝9時に来られて夕食を共にして帰宅されるまで、数10年間心血を注いで研究した奥義の講義に余念なく、取引している山種の店にも在京70日間に、5分ずつ数回うかがったにすぎなかった。

にもかかわらず、どこで嗅ぎつけるのか業界新聞の来訪がうるさくなり、またある人は貴殿の買玉を山種が田舎者と侮ってガブ飲みにして青くなっているとか、次第に蛸殻町の雀に騒がれたしたので、ちょうど10週間で札幌に帰ったが、この大暴落と大暴騰を自分で作ったかのように新聞に書きたてられたので、いつしか「北海道の罫線屋」という仮称に変わり、以来新聞はこの名称で通るようになってしまった。

札幌にいた頃は「大神宮さま」と呼ばれていたが、この起源を調べてみたら、ある剽軽者がごりやくがあるかどうかはわからないが、神棚に向かえばただなんとなく拍手を打って頭が下がるのと同じだ、といったことから始まったのだそうだ。

東京、大阪に転住してから今や8年、大神宮さまでは罰が当たる。罫線に埋って生涯を貫き、前代未聞の記録を樹立、日本国中の大土俵で、われと思わん者は立ち向かえと、永年にわたる太鼓に、相手が現れないのだから、「罫線の横綱」とか「罫線の鬼」とでも呼んでもらえたら、冥土の閻魔さまに娑婆の報告も簡単にすむのだが、と苦笑している。

東京、大阪への進出

正直な売買白書

昭和31年8月14日、千歳空港のタラップを踏んだ。久しぶりに帰宅してみれば、新聞で知っている郷土の会員が集まって、わがことのように喜んでくれるので、東京転居を数日間言い出せなかったし、家族や親戚もまた住みなれたアカシヤの都に未練があつて意見が揃わなかった。

地所付きの家も莫大な金で買って来たことだし、次第に成長する子供のためにも、この際東京と大阪に転居しておく必要があることを説き、暑いところだと言っても火傷をした人もないとなだめ、やっと意見の一致を見ることができた。

かくして昭和31年9月20日、生涯夢にまで見た東京に転居できたのだが、この実現を心に誓ってから41年を過ぎていた。

東西に落ち着いてからは、第2巻「逆張之巻」の発刊に余念がなかったが、一方小豆相場のほうは10月の当限締め上げに引っかかって2000万円の損をしたので、一時手を引いて休み、時の至るのを睨んでいた。

明けて、32年1月5日、小豆が7100円台に暴騰し、小豆は買いさえすれば儲かるかのように、屠蘇気分も手伝って万人総買人気となったが、罫線は完全な売型となったので、ここぞと全国の全員に売れと打電、売買指図依頼者の売建てをしたが、それが大天井となって6カ月間、一本調子の下げを演じた。この素天井から売に出て、6カ月間売一貫したのは貴所だけだと騒がれたが、実際には3月の当限で中限より2000円高の締め上げを喰い、またまた2000万円の損をしたのである。

これは納会前に2000万円の損で見切りをつけ、当限より2000円下鞆の中先限を売に出てすぐ取り返したというものの、上京以来相場の観測には満点的中をしていいうものの、この大衆の所員が総がかりでやったのだから、延べ年数にすれば、再検討だけでも5年を要したことになる。

でき上げた商品、開所以来の成績で調べたら、損益あ

るごとに投資金に加除して売買するとすれば三年千倍、悪くても五年万倍になることは確実であるし、全銘柄に分割投資さえすれば、たとえ売買白書の当限戦の失敗や追証回数の大失策をしても、一店で仕掛けているかぎり、追証を呼ばれる心配のないことが確認されたので小躍りして内心、万歳を叫んだ。そこで、追証無害「三年千倍法」と名づけ、奥義伝授料は1200万円に決定、この売買法の3割に及ぶ売買法の揭示者に200万円贈呈の懸賞金をつけて発表した。

しかし、釣足研究家のほとんどない時代だから、嘘だと思われたら困るので、3名にかぎり1人30万円で伝授することを付け加えたところ、1カ月間で定員に達した。その後もなんだかんだと追加伝授の希望が現れるので、60万円に値を上げ、なお1カ月を過ぎるごとに5万円ずつ値上げすることを発表した。

それでも次々と申し込まれて押さえがたいので、100万円になってから1カ月ごとに10万円ずつ値上げして、定価の半額600万円までにすることを発表したのだが、日を経るに従って伝授料の安いことが認められ、伝授希望者が減らないところを見れば、いつ自分が急死しても、一族の生活費は充分に入る、無形の遺産が遺されていると家族に感謝されている。

数多くの講演会に招聘されて

東京に転居してから、次第に当研究所の存在を認められるようになり、業界新聞記者の来訪も激しく、私の名もしばしば紙上で見られ、寄稿の依頼や講演会にも講師として招聘されるようになった。

なかでもいまだ印象に残っているのは、業界にこの人ありと知られる石井独眼流先生主催の小豆相場の観測講演会が、昭和33年8月15日、茅場町の立花証券本社で開催されたときと、昭和35年9月、現物問屋で商品仲買人としても堅実屈指の端山商店が上野精養軒で開催した小豆作況報告会に、「罫線から観た小豆相場」の演題で、講師として招聘されたときである。時あたかも小豆相場

が人気の中心、講師は柴田秋豊先生と新聞が報じたため、いずれも満員の盛況だった。

その先行観がズバリ的中して聴衆に感謝され、会う人ごとにおかげさまでと礼をいわれたうれしさは、自分で儲けたより以上で、これ一筋に生きてきた自分でなければ味わうことができない満悦を感じた。

石井先生主催の昭和33年は小豆の大豊作。自分にはからずも九州と北海道を2カ月間視察旅行してきたが、猫も杓子も大豊作を謳歌、今秋からの小豆は砂利代わりに道路にでも敷かねばならぬかのようにいわれているし、本日も農林省が作付面積の大增反を発表したと新聞は報じている。

このように万人総売人気の売玉を誰が買い向かっていると思いますか？ おそらく100人で売った数を1人で買向う、大手筋の買であることは火を見るより明らかで、相場は売ばかりで値がつかない理論を説き、「相場は人気の裏」が出るという金言はこんなときに現れる、ここが大底になると強調した。

一方、罫線はどうなっているかについて、小豆開所以来の罫線を掲示して、自著順張の巻ではいき型いよ型の買で大底であることが明示されており、逆張の巻ではお型買が確定されていると、この法則法示を解説、開所以来、この型の買法示になったの転換を残らず指摘して強調、これが間違ったら私の著書もいま一度、研究し直して再版するとまでいい切って聴衆をうならせた。

はたせるかなその翌日、1610円が大底となって、1900円の大幅上げとなったので、罫線の研究に一生涯を捧げた面目を一新したのである。

自分はいつも「だろう」とか「思う」とか、あいまいな言葉を使わないことは著書も同じである。材料の一端を指摘しての観測でなく、森羅万象が織り込まれた罫線学による先行観測であるだけに、この道の素人玄人を問わずいつも人気があり、また数多く招聘された研究会、座談会に至るまでその観測は見事な中を示してきた。

全国に挑戦者を求めて

3回目の挑戦状

私は自著の『野線修業時代の苦難』の項に、第1巻発行に至るまで2回行った挑戦試験の苦勞を書いたが、この道で自著が他に優るかどうかが、皆さまにお勧めしてよいかどうか？を試験することは容易なことではない。

ほかのことなら何事でも、角力には場所角力があり、囲碁将棋には名人戦というように、必ずその優劣を競う機関があるが、相場観測の道には何も無い。ために研究家の中には自己の創見が最優秀だとうぬぼれ、一人よがりしている人もあり、素人研究家にも劣ると思われる人でも、許可制度のない職業だけに、新聞雑誌の記事や噂を聞いての通信社が多い。

こんな始末だから、私が東北に転居してからでも、全国で200社ぐらいの通信社が現れているが、ある期間を過ぎると消えてなくなっている。これは何を意味しているのだろうか？

私は数10年前からいつも口にしてきたことは、自分の研究は金儲けのためではなく「日本一の売買法を著して後世に残したい。また子々孫々まで生活できるものを著しておきたい」ということが念願であったし、またこれを実行してきたことは世間がよく知っている。

たとえば第1、2巻を発行するのに1300万円を要したが、何々書院蔵版と印刷していないから著作権も発行権も持っている。初志を曲げて他人の投資を仰いだり、発行権の一部すら他人に持たせていない。書店の棚を調べても、こんなに欲張った著書は1000冊に1冊もないといわれている頑固を通してきた。

こんな目標のもとに研究したのだから、優秀か？どうか？を試験しなければ週刊誌の発行ができないので、昭和33年6月から、憎まれることを覚悟して、第3回目の200万円懸賞金付きの挑戦をしたが、これはけっして威張るための仕業ではないのである。

私は数10年間、この研究のみに生きてきたので、現在の数10倍もあったと思われる米相場や新東時代からの通信社の広告を残らず見てきたが、いまだかつて優秀を競

う挑戦広告を見たことがない。それから推しても、この道は自惚れは多いが真の研究家がないことを知っている。

雑作のないようだが、今日に至るまで、私は死ぬか生きるかの瀬戸際に立つ思いで試験してきたといえることは、200万円の懸賞金や数百万円の広告料等は問題にしていけないが、今の金にしたら何億円かけた研究費と努力が下手にすると水泡に帰し、勝者の逆宣伝等々で私著の売行きも止まるだろうし、笑い者の種になることは火を見るより明らかだからである。加えて、一家全員がこれ一本の職にあるため、皆が揃って失業することもありうる。心ある後援者はこの暴挙に真っ向から反対で「日本は広いぞ」の捨て言葉で忠告されたのも無理はないと思っている。

ところがまた反対に業界の識者は、もし貴社の挑戦広告がなかったら昔のように、雨後の筍のごとく数多い通信社が現れていたであろうと、この壮挙をほめてくださるお方もあるので、お世辞だと思いながらもうれしい思いもしてきた。がしかし、長生きしたおかげで前後3回、数10年間にわたって挑戦試験を重ねた事実は、長く斯界にその1ページを残したと賞賛され、これも初志貫徹の一端と喜んでいる。

大山鳴動して鼠一匹も現れず

業界の8大新聞に1回広告すると200万人に配達され、それが前代未聞の懸賞付き挑戦なのだから、業界は鼎の沸くがごとき波紋を描いて1大センセーションを巻き起こした。

聞くところによると、毎週1回この挑戦が出るので、野線学を知らないのだが、野線の天狗連中に3割ある法則があれば200万円、1割の指導や報道ができていれば200万円、合わせて400万円贈呈とあるが、貴公はないのか？

と、日頃の天狗鼻をへし折ってやったと、得意顔している皮肉な人も現れて困ってしまった。そんな調子で関係外の人まで騒ぎたてたものだからたまったものではない。電話、来訪、書信が山積みされて悲鳴をあげた。

電話で、電車で行くから1時間半後に着くと予告した人が、その間に誰かに取られてしまうのではないかと、雨の中をタクシーで乗りつけたり、懸賞金は支払い済みか否やを問い合わせてくる電話、速達等々、予想はしていたものの目を白黒せずにはいられなかった。

一方、挑戦宣言は毎週連載したために、九州四国方面に至るまで遠路わざわざ挑戦に来られる人が多くなり、これでは何もできないので問答書1万部を印刷して散布したところ、さしもの騒ぎも蛙がさえずる古池に石を投げ込んだかのごとくピタリとやんだが、それでも次から次へと懸賞金だけほしがる挑戦はいまだに絶えない。

挑戦者名簿の御芳名を書くことは遠慮するが、予想どおりの自己満足ばかりで、トランクやポストンバッグで持ち込まれた秘蔵の野線を見せて帰られた人は10人に1人で、あとは当所備えつけの赤黒指標野線に驚いて、みな見せずに帰宅されてしまっている。第1に証拠のない、口だけで当たるといわれてもつかみどころがないから、後日証拠野線ができてから、再度来ていただくようお願いするほかなかった。このうち、必ず再訪することを約し、熱心な研究者と見られるお方が数10人あったが、いまだもって1人として再訪されない。大山鳴動して鼠一匹さえ現れず、張り切った気持ちも抜けてしまった。

掲示を願っている証拠野線は、当所備えつけの3割だから今なら1500年間を要するが、5年前は規定書のとおり50年間でよかったのだから、どなたにでも2週間後には証拠野線ができるはずなのだが、いまだに1人も再訪されないところを見ると、この道の研究で生きてきた自分まで、騙して懸賞金を詐取しようとするくらむ人の多いことに驚くと同時に、こんなありさまだから、野線で相場がわかるものかと世間から酷評されるのも無理はないとつくづく感じた。

相場占いと野線

さる5月26日の週刊誌『株式につぼん』に、推理小説家として有名な高木彬光先生の「相場と占い」という随筆が載っていた。

その中に「相場の世界では、バカといわれ、正気の沙汰ではないといわれながら、必勝の野線をあみ出すために、何10年の時間をかける人間も存在するのだから」と

書かれてある。これを読んだ私は、あることで私の生涯を知っておられる先生だから、自分のことを書かれたことを直感した。

また占いでも有名な先生は、「ただ、私の信念は、趣味を持つなら、それで食べるぐらい徹底して、研究してみろということにある。推理小説で食べるというのが、もともと趣味の延長のようなものだし、占いというのも、せっかくこれだけ時間をかけて研究したのだから、それを万人が納得してくれるような結果が出るまで追求してみたいと思うだけである」とある。

自分もまったくそのとおりの信念に生き、徹底した研究をしてきた。そして万人に納得どころか驚嘆させようと、終生の遺作として発刊したのが週刊誌『全銘柄の指標』なのである。

またその文中に「占いで相場をあてるということは、難中の難事といわれている。相場の専門家に聞くと、占いや野線で相場がとれたら、お目にかかりたいというようなことをいうし、占いの専門家に聞いても、占いで相場がとれるような人間は、十年に一人現れるかどうかという天才だけだから、ふつうの人間には望めないというのである」と書かれている。

先生は正直に、率直に世人の空気を書かれているが、私にいわせれば、こんな相場の専門家とかいう人は、糞尿製造機のような人で、その人にも100年前に科学の進歩を想像させたらラジオやテレビはもちろん、電子計算機の出現などは空想もできなかった人だと思う。

次に言葉を重ねて先生いわく「その点、相場の占いだけは、はっきりしている。人間の運命予想は口でごまかせても、こっちは何のごまかしもきかない。プラス、マイナスの数字は、はっきり記録にあらわれるのだから」と率直な言葉が述べられているのに敬服した。まったくそのとおりで、相場の観測だけはごまかせない。だからこそ世界を通じて一番むずかしいこと、完結はおぼつかない、とさえいわれているのだと思う。

私が変化急所は電報付きで、印刷した週報を5年間続け、万倍を突破した実証を挙げて、会員以外の方は、ことごとく水から火が出たと聞かされたように、鼻の先で嘲笑する人が多いと聞かされるのだから、しょうがないものだと思っている。

証券会社には「推薦株」の責任がとれるか

前述したように、自著の3割ある売買法の創見者に、200万円贈呈の挑戦で観測法の試験制度や、優劣を決定づける機関のないことを幸いにして、勝手な熱を吹く天狗連の鼻をへし折った。いまひとつ、ただ肩書きを看板に、まことしやかな観測や理屈や意見の発表。さては上げ下げみな取りにしているかのような通信の広告が、その的中率や成績も示さないで毎日の新聞をにぎわしているのに疑問を感じている。

これらの人は罫線無能論者、あるいは罫線以外の観測方法をわきまえている人であると見なければならぬ。この部外者に挑戦しなければ観測の優劣が決定されないのである。そこでこの通信成績の1割ある通信や観測の証拠を掲示されたお方に、金200万円の懸賞付き挑戦を追加した。

ところが観測法の懸賞金には前述のごとく鼎の沸くごとき騒ぎを起こし、いまだに寝呆けたことを言うてくれる人があとをたたないが、この実戦同様の通信成績に挑戦してくる人は、5年間広告した今日なお、1人の応募者も現れないという現状に、ただ呆れはてている。

本当か嘘かはわからないが、数年間にこれだけ株で儲けたとか、10数回商品で当たり続けて出資金が何10倍になったとかいってこられた人は10数人であった。これらの人に、株が何年も上げ続けたときは誰でもそれぐらいは儲けられるのだから、下げに直面したときの実績をあげてから再訪されたいと諭して帰し、また商品等の当たり屋には、運のよいときは夢ではないかと自分の体をつねってみるぐらい、当たり続けることは誰にでもある、だから懸賞規定の証拠までできなくても、いま少しやってみてから来てもらいたいといってきた。それからその後の成績を問い合わせると、1人残らず討死にしたことを自白しておられるが、このように永年の損益統計を出すことは至難中の難なのである。

これに関して監督官庁も、的中率調査の必要性に気づいたのか、去る2月25日の日経に「調査費8000万円」の見出しで、証券会社の姿勢を正すという意味かどうかは知らんが、このところ大蔵省の証券業界に対する風当たり、いいかえれば行政指導が話題になっている。

この中に、各証券会社が「注目株」「推薦株」とうたっ

てセールスしているものが、投資家にどのようにどれだけ流れ、またそれがたとえば利が乗ったりして再び各社にどれだけ戻ってきているか、といった実態を報告させようかという動きもあった。

ところである証券会社がいうには『そんなことを要求されたんでは、調査費に8000万円もかかってしまう。どえらいことだ』と。

ところ変われば「品」ばかりでなく、考え方も変わるというわけだろうが、『大蔵省は自分でかせいだ金で「めし」を食っていないからだ...』は酷評すぎる。

との記事が出ていたが、私はいいたい。当社のごとき微々たる通信社さえ、己が通信に責任を感じて、その成績表を表している。莫大な手数料をもらっている証券会社が、調査費の8000万円ぐらひは、当社の成績作成費に比べれば鼻糞にも足りない費用ではないかと。そんな弁解をするより、それを明白にしたら商売にならないと、正直にいったほうが客も溜飲がさがるのでなかろうか。

このように永年の通信成績を公表するという事は、難事の中の難事でいまだかつて遂行した人がない。私はこれを遂行して、一割に及ぶ成績をあげた観測者がいないという記録を確立したことは「罫線研究生涯棒」の肩書きを持つ私の誇りとしている。

「罫線研究生涯棒」

この道に精進した生涯の遺物

「虎は死して皮を残し、人は死して名を残す」とか、さて自分は死して何を残せるか？を拾ってみると、

第1に、罫線の研究こそ、相場を科学する唯一の方法であるとして、嘲笑、罵倒をものともせず、あらゆる苦難にたえて、一生涯これの研究を貫いたが、今や新聞雑誌、テレビはもちろん、10大証券に至るまでことごとく幼稚ながらも月足等を発行して罫線観測の重要性を認めるようになり、40年前から強調した自分の主義に同調してきたことである。

第2に、若冠20歳で億を利し、億の負債に孤軍奮闘、利子1文まけてもらわずに完済した努力と腕は一生涯の自慢の一つ。

第3に、昭和13年38歳の頃、早くもいまだかつて類例を見ない観測法の挑戦をあえてし、斯界の王者？として世に知られるようになっていた。

第4に、昭和24年までに、総平均と業種別平均株価を独創、この写真を入れた平均株価3色刷8000枚を印刷、これを業界に発表して、わが国平均株価試算の創始者となった。

第5に、昭和31年に棒足順張之巻、32年には棒足逆張之巻を著し、発行予告の鈎足之巻と特殊足之巻を合作して、33年には機械式売買法を著し、予告しての未発行は、日柄観測之巻のみにこぎつけた。

第6に、定価12万円の価値を認められない人には売りたいと誰にでも10日間無料で貸本、不用者は返本すれば良いという前代未聞の販売法を採り、優れたものならかくしても売れるという、いまだかつて他に類例のない自信の販売方法に1ページを飾った。

第7に、札幌と小樽市に研究所を設けて20年間、待望の東京、大阪に転じて8年間を過ぎ、全国にわたる会員と家族に都会進出の永年の約束を果たした。

第8に、日本の著書で最高値が8500円とか聞くが、その倍価格で8年間に第1版は売切れという意外の好評裡に売れる、著作権と販行権を子孫に遺すことができた。

第9に、生きた実戦の著書を執筆することを宣言、昭和31年11月1日から5年万倍を予言して全商品の週報を発行し、株式10年万倍を目標に、1700銘柄を東西に公開、37年6月16日から株式週報を増刊、予言をはるかに越えた実績を残し、古今未曾有の大記録を樹立した。

第10に、この法則の3割に及ぶ売買法創見者に、200万円贈呈の懸賞金付き挑戦を昭和33年6月から挑み、ついに日本一？を確立した。

第11に、この利益記録の1割ある指導者に、200万円贈呈の懸賞金付き挑戦を挑み、相場観測界の最高峰？を確立した。

第12に、かくのごとき試練を経て『株式と商品、全銘柄の指標』と題する古今未曾有の週刊誌を発行することができたが、週刊誌は個人経営等ではどうていけない大事業だと忠告されてきたことを遂行してきた。

さて、以上のような実績を残したが、これを一族に与えた遺産として計算してみると、2億円の現金を残したと同じになる。ということは年5分で2億円を銀行に預金すれば、1カ月83万円の金利が入る。当社1カ月の経費平均はちょうどこれくらいだから、これをまかなっていける収入から割り出した遺産額だといえる。こんな推算をすると、銀行預金は遊んでいても入るが、貴社の月収は11名が毎日勤務しての収入だから違うといわれるだろうが、総員で1カ月のサラリー総額が30万円と仮定して年間360万円。平均これくらいの不動産やその他が残されているから遺産ではない。

このように自分は、目標どおりのことを成しとげ、いつ死んでも娑婆になんら思い残すことがない身分にさせてもらったので、毎日感謝の余生を送っている。

罵倒や迫害にも耐え忍んで

私の若いころ「ただ見れば、なんの苦もないあの筏乗り」という緑江節が流行ってよく歌ったものだが、この道もまったくこの唄のとおりで、寸分の油断もできないし、今にも転覆しそうになって脂汗を流すことや、夜も

寝つかれないことがしばしばあった。

誰でも私の観測が当たっている間は、ご自分の観測どおりに動いたかのように鼻高々と自慢話でチャホヤされるが、一朝曲がってからというもの首つりの足を引っぱるような電話ばかりで、ベルが鳴るたびにヒヤリとさせられた。それより日頃、敵視している同職の人から、それでも先生かと悪口雑言の書信が無記名で、挑戦を始めた3年間くらいはしきりに舞い込んできた。

その文面からわかったことだが、私の新聞広告が「この3割の法則と1割の観測者におのおの200万円ずつ400万円贈呈する」と毎週掲載されるのだから、これぐらいの迫害は当然だとあきらめるよりほかなかった。それで自分の挑戦広告と他社の広告はせめて並べて掲載しないよう新聞社に頼み、それでも気の毒だと思うので、極端な広告が多く出る3新聞社には、ここ2年間挑戦広告をしないで遠慮してきた。

ところが同じ迫害でも、天人ともに許しがたく、私の生涯をかけた地位も名誉も一瞬にして踏みにじられたことがある。それは東京穀取引理事会で、某通信社の取引業所法違反か？ が審議されたとき、どなたの動議であったかは明瞭ではないが、柴田某についても調査する旨が議事録に記載され、それを穀取引の全会員に配布されたのである。

これを知った私はさっそく協会を訪問、当社営業のどの点が悪いのか？ ご指示を仰ぎたい、また私にどんな怨みがあって全仲買人にこの議事録を送達されたのか？ 協会とは100メートルしか離れていないのに、どうして呼びつけの電話なり、議事録どおりの調査に来ないのか？ を詰問し、なお総会なり理事会にぜひ私を呼んで審議してもらいたいと、当社の規定書を置いて頼んできた。

それから2回、早く調査するよう催促に足を運んだが、いまだに音沙汰がない。弁護士や業界の誰に聞いても立派な営業妨害であり、名誉毀損だといわれるが、待て、「ならぬ堪忍するが堪忍」だと、いまだに告訴状を握りつぶしている。

また私は、業界紙に野線から見た相場の先行観測をししばしば載せてきたが、いずれも的中した。なかでも今は最後となった二年前の商品全銘柄と平均株価の先行観は二日間にわたって掲載したが、暴騰暴落型の予言は残ら

ず的中して読者を驚かせた。

このとき、取引所のあるお方が、どうして仲買人以外の者の先行観を載せるのかといわれたとかの噂を聞いたのでそれきりやめたが、反面なんとか時々載せてもらえまいかと遠く北海道に至るまで言われるので、弁解に困ると同時に、あの店も飲み屋かと疑わざるをえなかった。こんなときはいつも「気に喰わぬ、風もあろうに柳かな」の名句を味わって、会員のお引き立てで生きてきた。

思い残すことなし

さて私の履歴書といっても、前半は著者の序文を載せ、後半も会員に知っておいていただきたい職業上の経歴を主にし、将来野線研究の老舗とする目的の1ページとして書いたもので味もなく面白くもない履歴書になってしまった。それも悪い面のみ書いたので恥さらしになってしまったが、前編はこの事実を残らず知っている人の多い故郷アカシヤの町で、後編は現在の東京で書いたのだから、少しの嘘もなく付け加えもない。

なにしろ15歳のときから先代に財布を預けられ、一流人の仕事をやってきたので、62歳というけれど社会に泳いできた人生は長かった。

自分の生涯を、そっくりそのまま歌うように思えてならないのは、村田英雄の『王将』で、いつも涙ぐんで聞いている。

吹けば飛ぶような将棋の駒に かけた命を笑わば笑え
生れ浪速の八百八橋 月も知ってるおいらの意気地
将棋の駒と相場グラフの違いはあれ、自分も坂田三吉翁の意気地には劣らなかつた。

あの手この手の思案を胸に やぶれ長屋で今年も暮れた

ぐちも言わずに女房の小春 作る笑顔がいじらしい
香代子が5歳、豊秋が1歳の昭和6年ごろ、落ちぶれて、間借りしたころ、家内は筆筒を空にして慰めてくれた
当時は思い起こさずにいられない。

あすは東京に出て行くからは 何が何でも勝たねばならぬ

空に火がつく通天閣に 俺の闘志がまた燃える
大記録の目標に挑戦を挑んだり、諸賢の浮沈を胆に銘じて、売れ！買え！の電報をするときには、何が何でも勝

たねばならぬの闘志に燃えてきた。

だが今や62歳、10年を過ぎた昭和48年に、「あれから10年」と、この続きを書けないことを知っている。父はあれから何年生きて、こんなことをして亡くなったと、この続きは誰かが書いてくれと、6人のわが子に頼む年齢になった。

精神一到何事か成らざらん。足軽の子に生まれた日吉丸も、関白太政大臣秀吉と名乗って天下を取ったか、自分もこの道では天下を押さえたことに満足し、明日死んでもこの世に思い残すことはない。おそらくこれが最後の執筆と思われるが、諸賢のご成功を祈って擱筆することにする。

昭和38年10月 柴田秋豊

齢62年6カ月